

禪學叢書六編

94

31

田中仙樵居士著

中茶禪一味

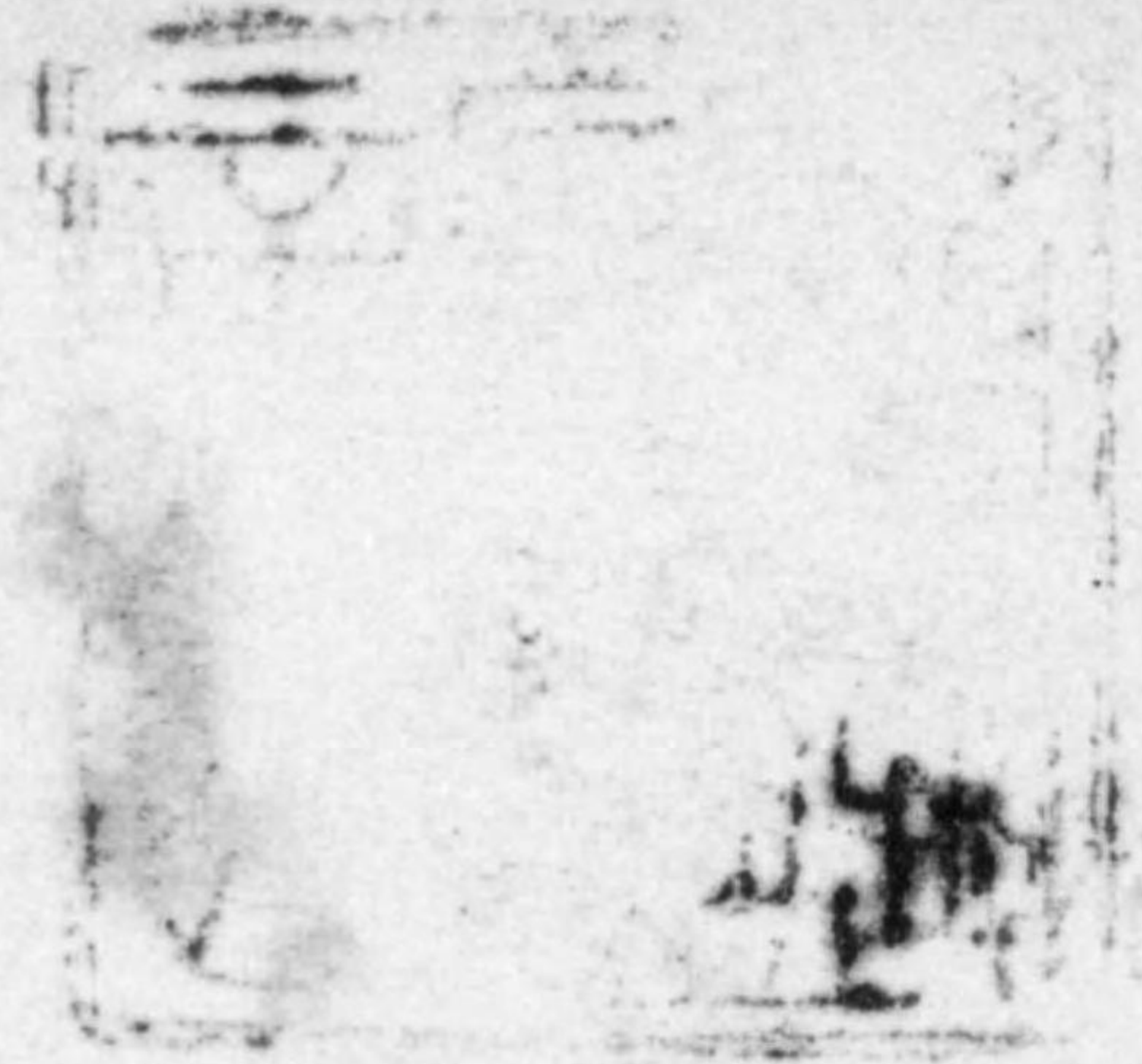
東京 光融館藏版

94-319



大  
學  
書  
庫

明治  
38 3 7  
内交



一味

禪

浮舟



自序

抑我國之茶道者。始于珠光。中興于紹鷗。大成于利休。遂以至成一種之國粹的道學矣。本來茶道於深味也。起自禪。資理於易。定禮於曲禮。夫然而大之則涉六合。而不可窮盡。小之則爲修身齊家治國平天下之基。豈不復廣大哉。然而星移物換。茶道之弊有名無實。化成一種之遊藝。爲婦女子之所翫弄。熟視今之茶人者。往往蒐集古器物以誇示衆人。或表面正襟巧言令

色。而裏面誹謗嘲笑遷時。其甚者爲庭園數奇  
結構。至于蕩盡家產。於之乎爲識者之所擯斥。  
僅留其形跡於逸遊者及婦女子間耳。嗚呼茶  
道之衰亦一至此乎。

茶聖宗旦翁茶禪論曰。愛奇貨珍寶。擇酒色之  
精好。或結構茶室。翫樹木泉石爲遊樂設者。違  
茶道之原意。只偏甘禪味爲修行。是吾道之本  
懷也云々。由之觀是。可識茶味與禪味同一味  
也。不肖曩興立大日本茶道學會。聊唱導禪的

茶道矣。今更錄茶禪一味焉。讀者請誤無爲附  
會之戲論私說。則幸甚也。

於三德庵

田中仙樵識

## 凡例

一本書題して茶禪一味といふ。元是茶道の禪的趣味を唱道せんと欲したるが爲めなり。將に出版せんとするに際して。光融館主人更に禪を説かむことを請ふ。咄嗟筆を呵して前半稿を奔らす。故に名實相添はざるの觀あるのみならず。文字も亦相接続せずと雖も。今や全編を補筆するに遑あらず。看者之を諒せよ。

一本書は。前半に於て禪を説き。後半に於て茶を説き。以て茶禪一味の實を擧げんことを期せりと雖も。遂に支離滅裂の體裁に終る。然れども前編は自ら信ずる所を吐き。敢て諸書を涉覽して參書とせざるを得意とす。又一人の知己なしとせんや。

一卷末載する所の利休論は。畏友星野天知君の舊稿に屬す。請ひ得て附録とす。同氏の爲めに茲に其厚意を謝す。

明治三十七年臘月除夜前一日

著者又識

# 茶禪一味目次

## 前編

緒論 一九一一年

- 一 緒論……………一
- 一 哲學と佛教との關係……………五
- 一 佛教と一元論……………一〇
- 一 佛教的物質觀……………一三
- 一 エネルギーと四大說……………一九
- 一 六大と物質……………二四
- 一 物質の本體……………二八
- 一 物質の靈動……………三二

- 一 物質の自存力……………三六
- 一 物質と因果律……………四一
- 一 草木國土悉有佛性……………四四
- 一 佛教の宇宙觀……………四六
- 一 因果の法則と宇宙……………五三
- 一 動の大原則……………六二
- 一 宇宙の心靈……………六三
- 一 佛教の人性觀……………六七
- 一 佛教の生死觀……………七三
- 一 靈魂とは何ぞや……………七五
- 一 死後靈魂の状態……………七九

後編

- 一 死後の實驗法……………八二
- 一 佛教の倫理觀……………八五
- 一 因果律の例外……………九五
- 一 禪宗の因果觀……………九七
- 一 禪の處世觀……………九九
- 一 緒論……………一〇五
- 一 茶道病論……………一一〇
- 一 茶道體用論……………一一六
- 一 茶禪論……………一二八

- 一 茶道の沿革……………一四六
- 一 茶道の興立……………一四八
- 一 茶道の分派……………一五〇
- 一 茶道の大成……………一五一
- 一 茶道の本旨……………一五三
- 一 誰か茶道を怯惰の法と謂ふ……………一五五
- 一 點茶は禪法なり……………一五七
- 一 懷石の文字……………一六一
- 一 數奇の文字……………一六四
- 一 露地の辨……………一六七
- 一 茶の湯の文字……………一六九

- 一 草庵の意……………一七二
- 一 四疊半は茶席の根元説……………一七五
- 一 捨虚取實傳……………一七七
- 一 意進理進業進……………一七九
- 一 點茶は無念無想の法……………一八三
- 一 主客氣位の事……………一八五
- 一 丹田の養成……………一八七
- 一 點茶體用辨……………一八九
- 一 無賓主の茶……………一九一
- 一 和敬清寂の解……………一九三
- 一 茶道は不立文字以心傳心の法……………一九六



一茶道は草より入て草に終る……………一九八

○喫茶法語集……………二〇一

一澤庵和尚示茶人某書……………二〇一

一語錄四則……………二三三

一南坊錄拔粹……………二三五

一利休一枚起請……………二六四

一小堀遠州公書捨文……………二六五

一澤庵和尚壁書……………二六七

一光廣卿御壁書……………二六八

一夢庵戲歌集の一節……………二六九

一無難禪師法語の中道歌……………二七一

一大心和尙の記……………二七五

一珠光古市播磨法印への相傳の畧……………二七六

一茶話抄附録……………二七七

一壺中爐談……………二七九

一和漢故事談……………二八〇

一一問故實……………二八一

一露地清茶規約……………二八二

一吸江の齋號……………二八四

一茶話真向翁……………二八四

一不言亭禪話……………二八六

一珠光問答……………二八九

一 澤庵和尚茶亭の記……………二八九

一 茶道安心論……………二九一

一 又玄夜話……………二九四

一 茶禪一味……………二九六

○ 禪茶餘韻集……………三一〇

○ 附錄

一 利休居士の悟道に付て……………三一六

諸君 幸平

# 茶禪一味 前編

田中仙樵 著

## 一 緒 論

近頃、禪學の流行盛なりと謂ふ者あり。予其何の意味なるを知らず、其流行するてふ言葉さへ、甚だ奇しく思ふ程なれど。子細に考ふれば、別にあやしむに足らず、畢竟、科學の進歩は、哲學の發達を促し、哲學の隆盛は、宗教上の疑問を哲理的に解釋せんと試むる者を續出せしめ、從て宗教中、特に不可知的の禪宗は、其教義に於て、到底學者の窺測すること能はざるものあるが故に、競て此門

に蝟集するに外ならず。然れども予を以て之れを見れば、真正に禪風盛なりと云ふにはあらずして、禪を口にす、所謂ひやかし者多きに過ぎず。元來禪とは、實驗的法門にて、書籍や言句を以て擧示し能ふ可き性質のものにあらず、管座禪の法に依て實修し、以て自得すべきのみ。座禪の法は、普勸座禪儀、座禪用心記、六祖檀經杯讀む時は、其如何なるものなりやを知るとを得、禪宗の道場に於ける、宗匠に接する消息法式等は、百丈清規一見するも了知するを得可し。或は又公案の解釋法の消息を知らんと欲せば、佛光錄、臨濟錄等の提唱を聞き、多少這般の様子を窺測し能ふものなり。近來禪學と名つけて、如何にも一讀、大悟し得る妙法を傳ふる如き書、汗牛充棟も管ならずと雖も、畢竟以上の書物杯の講釋に外なら

ず。予是れを一讀する度に、世に不親切の者多きを觀せざるはなし。禪とは曩に述たる如く、修す可き法にして、讀み、聞き、習ふ可き法にはあらず。故に只禪の宗門は實參實究の外、決して他に傳法あるとなし、然るを通俗禪とか、平易禪とか、特に文字禪杯唱へて、文字を以て禪を傳へんとするものありと雖も。是れ人を偽るに非ずんば、自ら禪の禪たるを知らざる野狐たるを斷言して憚らざるなり。寔に禪は、人を愚弄するに都合よき法なり、隨分遁辭も多き宗旨なり、人あり佛を問ふ、忽ち一掌其面を喰はず、痛を忍で禮拜す、掌する者其意を知らず、禮拜する者も亦其何の故たるを解せざる如き場合屢々之れあり。而して茲に他を顧て曰く、以心傳心教外別傳なりと。咄々、かゝる輩を指して野狐禪の徒と謂ふ、近頃此流の輩を

以て充滿す。予は斷じて云はんとす、禪を以てかゝる弊害多き翫弄物と成さしむるは、其罪賣禪の人にあると。禪は書籍言句を以て賣る可からず、買ふ可からず。宜しく一切實參實究によりて工夫し、一と先づ身心脱落の、大禪定に入りて自得す可きなり。

夫れ然り。而るに茲に禪書を編むの理由は甚麼。曰く、予の茲に論ずるものは、決して禪を傳へんと目的にあらず、禪學の理論を解釋して、現今の哲學と背馳するや否を判じ、彼の學者が禪を目して一の意識作用とし、更に宇宙の哲理に合せずと稱ふものに、聊か答へんと欲するのみ。而て禪を實地に修する便法としては、古來風雅の道として傳はる、茶湯の法を以て之れに配し、俗人の爲めに窮屈なる座禪に代へしめ、聊か前半に於て禪を理論的に證明し、後半に

於て茶を禪的に修せしめ、究極二者合して一味となり得可くんば、學者をして茶道研究の趣味を發意せしめ、遊藝として埋没せる茶道を復活するを得可きにはあらずやとの老婆心より、是れを茶禪一味と名づくるのみ。

### 一 哲學と佛教との關係

吾人の仰で見るところ、俯て考ふるところ、無意味に看過すれば夫れ迄なりと雖も、之れを子細に疑ひ來れば、悉く是も疑問の種ならずや。學者は忽ち答へて謂はむ、天體は之れ現天文學の進歩によりて、其原始より運行の法則に至るまで證明せられ、地上は是れ動植物地文地質の諸學、之れを講究して餘蘊なきにあらずや、宇宙の

間夫れ何物をか疑はむ、たとひ、今日疑問とす可き點あるも、明日は科學の進歩を待て、忽ちに氷解す可きのみと。然れども、此輩は未だ疑ふ可きを疑はず、究む可きを究めざる、所謂井蛙の管見のみ。古來如レ斯學者多きが故に、茲に少しく宇宙の疑問を摘指して、其反省を促すの必要あるなり。

疑ふ可し、吾人の過去を、未來を、又現在を、吾人は何れより來りて何れに去るか、問旨は父母より生じて墳墓に去るの謂にあらず、吾人の靈魂の去來を謂ふなり。禪的句調を以て謂はむ、汝の生れぬ先、親の顔を見たりや否や、其死し往く先は何れなりや否や。疑ふ可し、吾人眼前の世界を、吾人眼前の現象は、是れ果して虚なりや實なりや、若し之れを實在と假定すれば、何れに生じて何れに

行くや、或る宗教家は、直ちに神の造る所と謂はむ、然らば神の存在は之れを如何にして知れるや、又其神は如何にして生じたる乎。疑ふ可し、吾人は何故に社會を存し、而て其社會を維持するに、道德の法則を守らざる可からざるか、學者或は之れに對へて謂はむ、社會の必要上而かくせざる可からざるなり、所謂方便のみと。然れども何故に其人爲的法則は、世界符節を合して行はる、乎、又其賞罰何ぞ夫れ正しく行はれて漏れざるや。

以上の三疑問は、古來種々なる解釋を以て迎へられ、今日に至るも未だ歸一せりと謂ふ可からず。學者互に争ひ、宗教家各相闘ふ。畢竟此疑問の解釋を異にするに起因す、其狀恰かも百鬼夜行を演ず。若し夫れ誰れか大偉人物の出現して、一大解決を與へば、白日東天

に上りて迷雲茲に晴れ、眞如の明月皎々として、群星光を失するに均しく、百鬼の醜も忽ちに退散す可きものを。

如上の疑問に對しては、哲學語として、之れを、宇宙觀、人生觀、倫理觀と謂ふ。而して此解決を與ふ可き任務は、實に哲學者宗教家の責任にかゝれり、世の宗教家哲學者は、宜しく宿積の迷夢を醒覺して、萬代不易の眞理を悟り、快刀亂麻の斷案を下さざる可からず、徒らに雲を攫み、影を捉らへ、囁語を吐き、迷信を抱くが如きは、所謂一盲衆盲を導くの譬に均しく、社會の進歩を妨げ、害有て益なきものと排斥せらるゝに至る可し。夫れ如斯、職責を有する哲學者と宗教家とは、相互に提携し、科學者とも並行せざる可からざるに、二者共に科學を非認し、互に駁論するが如き有様なしとせず、然れ

ども既に廿世紀の科學は、到底一片の空論を以て非認す可くもあらず、必らずや、哲學及宗教は、其基礎を科學に採て建設せざるを得ず、科學に背馳せる宗教は、所謂迷信宗教たる邪教にして、科學を否定する哲學は、既に社會に存在を許さざるなり。故に曰く、科學と哲學と宗教の三者は、相互に接續關係して、暫も離る可からざるものなり、決して矛盾ある可からずと。予の宗教を論ずるに當て、特に哲學を引證して、其説明の材料とするも、蓋し論據を茲に酌むが故なり。古來禪を以て、佛教より除外せんとする者無きにあらずと雖も、是れ他の佛教と同一理論を以て解釋し能はざるに起因す。予の所見によれば、禪も亦凡ての佛教に背馳せざるのみならず、眞理は以て、他の宗派に超然とし、是れを研究して最新哲學に符合し、

之、れを實地に修しては安心立命を得、實に世界宗教の首位たるを信ず。以下神秘を漏らす所三十捧敢て甘受す。

十

### 一 佛教と一元論

古來哲學として研究するところ、其種類甚だ多しと雖も、究極するに、一元論と二元論のみ。其内容は神心物の一元、物心物神の二元に分岐するも、其以外には説ある可からず。近來唯物唯心等の一元論、稍吾國に迎へらるもの、如し。然れども、其所説古人の糟粕にあらざれば、即ち焼き直しのみ、更に創見と認む可きものなし。予の茲に紹介せんとする一元論も、亦二千有餘の星霜を経たる、最陳腐に屬する佛説なり。然れども、吾人は決して羊頭を掲げて狗肉を

賣るの、學問的詐欺師にあらず、故に自己の創見なりと鼓吹する膽力を有せずと雖も、世の佛教徒の多くは勿論、他の哲學者の佛教を視ることの誤解多く、全く佛教は科學と哲學を無視するものと考ふるが故に、茲に釋迦の骨髓を忌憚なく解剖して、佛教の所説、殊に禪宗の教義は、上宇宙の眞理に叶ひ、下科學の最新歩せる説と合し、之れを倫理に應用して悖らず、宗教として能く解脱を與へ、安心立命せしむるに足ることを、自己の所信に基きて證明せんと欲するのみ。然れども茲に豫め注意す可きは、予の所説は、或は佛教の所説と矛盾するの觀あること是なり。否。佛教家特に禪派の徒は、擧て之れを非認し、外道なりとて採用せざる可し、元より禪は修す可くして解す可き法門にあらずと雖も、第二義に下りて之れを哲學とし

ては解説し難きにはあらず。故に之れを、禪學或は禪宗哲學と稱へば可ならむ乎。如何に之れを修するも、理論に合せざる宗教なれば、既に哲學上に建立する廿世紀の宗教にあらず。禪は既に、之れを修して頓悟の法門となり、是れを哲學的に解して千古不滅の眞理として愛す可きが故に、茲に潜越を辭せずして布演する所以なり。斯く佛教の眞理を、哲學として露出すれば、大に宗教の價値を損するに似たり、如何にも斯くては、佛像を莊嚴の須彌壇上より下して、其金質を分拆するに均しき感ありと雖も、予は佛教所説を不可思議的、神秘的に附するを快とせず、禪を以心傳心に密封するを、却て不忠なりと信ずるが故に、茲に啓發的に説明せんと欲するなり。

吾人の茲に一元論と稱するは、無論、唯心的一元を指すなり。故に

唯物論を破るなり。然れども其唯心の所説たるや、舊式の唯心論、即ち、心の外に何も有るにあらず、物が實在せりと思ふも心の現象なり、物が決して實在するにはあらずと謂ふ杯の陳腐説にはあらずるなり。物質は物質として其實在を認めつゝ、而かも唯心なりと謂ふ、聊か古來の所説に異なる感あり、是れが果して佛説なりや否やは後に論ずる所を待て識る可く、良しや萬一にも佛説にはあらずとするも、予の佛教、特に禪學の眞理と認むるは茲にあるなり。

### 一 佛教的物質觀

夫れ物質の存在は是れを否定す可からず。又物質の不滅をも非認す可からず。何となれば、廿世紀に於ける科學の立證は是を打破し得



さればなり。既に物質の存在及不滅を認めつゝ、而かも唯心論を説く、既に相容れざるの觀念にあらずや。曰く然らず。此反問に對しては、吾人は先づ物質の本體、即ち物質の過去を説かざる可からず。現在目に見え、手に觸れ、活動し、成長し、凝て山河となり、集て大地となる物質と、目に見えずなりたる物質の變化せる状態と、物質の現出し來りたる以前の本體とを區別して認めざる可からず。物質の過去、現在、未來に於て、幾度其形態を變ずるも、尙是れを指して同一の物質と謂ふことの不當ならざる事、恰かも、後に詳論せんとする靈魂が、現在の靈魂と、未來及過去の夫れと同一なりとは謂へ、現在、此痛痒寒暑を感ずる靈魂と、未來の幽界に去れる靈魂とは、状態に於て變化ある可きは、何人も疑を容れざる所にして、

而かも靈魂不滅なりと説くと、其間に何程の差がある。更に反面より觀察して、同一論鋒を以て之れを謂へば、吾人は靈魂なるもの、存在を認め、且つ其不滅を認む、而かも現在に於て思慮し想像する此心靈と、過去に於ける心靈、即ち此精神の前身と、此靈魂の未來、即ち此肉體の朽ちて後の靈魂とは、同様の有様にあらざる可し、何となれば、現在の靈魂は肉體を有するが故に、能く苦痛を感じ、眼は見、鼻は臭ぎ、舌は味ひ、耳は聞くを得と雖も、此肉體を脱したる靈魂は、如斯作用を爲さざる可し。而かも、過去の靈魂が現して現今の吾人となり、去て未來の靈魂と變化するも、過去、未來、現在と、靈魂が一貫終始、同一本體なれば、之れを靈魂の存在靈魂の不滅と稱するも、何等の沒理あることなかる可きなり。

切て以上の物質観、靈魂觀にして誤なしと假定し、前提して、次に其去て變化せる物質と、依て來りたる物質の本體と、去て變化せる靈魂と、依て生じたる靈魂の母體と、偶然にも同一母體に生じたる雙子にして、同一家に歸る可き性質のものならんには、予は是を分身の兄弟、即ち其源始も一にして、歸屬も一、一步進では、現在身も二にして不二、哲學上の學語を以て謂へば、是れを一元論なりと名くるも、敢て牽強附會の臆説にも非ざる可し。果して然らば、此二者の關係、全く同一體なるの立證責任を有す、請ふ次第に之れを解かむ。

現今學者の説く所の物質論を觀るに、予は其眼孔の狭少なるに驚かずんばならず。其所説悉く相對を基礎として、限界的即有始有終

の實在中に座して、萬象を判斷するが故に、例令物質の無始無終を説明するも、現在の物質の無始無終を想像するに過ぎず。語を替へて之れを謂へば、物質は到底有形的ならざる可からず、有形より無形に入るとを想像し得ざるなり、故に物質を幾百萬分するも、分子を幾萬分するも、元素は委然として元素として存在し、肉眼或は顯微鏡に影ぜざるに過ぎずして、矢張物質として現在すと論ずるに外ならざるなり。故に元素の依て生じたる根元、元素なる物質の依て來りたる本來の面目を知らず、良しや一二の學者は茲に考慮を回らすことありとするも、形而上の學は既に科學の領域を脱するものとして、元素の無始無終に説を止むるものならん、然れ共最近の科學者は、理論上かゝる不合理を墨守するを欲せずして、進てエーテル

を論じ、ラジウムを發明し、エネルギーを考究し、今やエネルギーは物質を送るの母體なるを説明するに至れり。ラジウムは元素の元素にして、物質の一元を證明し、更にエネルギーは既に物質には非ずして、ラジウムを造るの力なりと謂ふ、力より物を生ず、物の前身は力なりとすれば、勢ひ唯物論は進で唯力論たらざるを得ざるなり。かゝる説は科學者に依て唱導せられ、哲學者の容るゝ所となり、滔々として今や宇内を席卷して、物質論者をして顔色なからしむ。而るに何んぞ知んや、かゝる眞理は、既に業に三千年の以前釋迦の發見する所となり、千古不滅の議論として觀破せられ居ることを。予は曩きに廿世紀の宗教としては、科學哲學の上に建立せるものならざる可からざるを謂へり。夫れ然り、茲に説明せんとする

佛○教、特○に○禪○學○上○の○眞○理○に○於○て○は、決○し○て○以○上○の○唯○力○論○を○根○本○的○に○排○斥○せ○さ○る○な○り。否○寧○ろ○教○理○の○根○本○は○茲○に○存○す○る○と○を○識○ら○さ○る○可○か○ら○ず。然○る○に○却○て、佛○教○家○は○是○れ○を○自○覺○せ○ず○し○て、斯○の○如○き○は○外○道○な○り、第○二○義○な○り、哲○學○上○の○戲○論○に○し○て○宗○教○上○の○眞○理○と○全○く○没○交○涉○な○り○と、平○然○遂○に○功○名○を○他○に○奪○ひ○去○ら○れ○ん○と○す、燈○臺○は○夫○れ○本○の○暗○き○の○乎。

一 エ子ルジと四大説

看○よ○や○經○典○を、何○れ○の○佛○教○を○問○は○ず、四○大○を○説○く。四○大○と○は、地○水○火○風○に○し○て、地○水○火○風○は○物○質○を○指○す、是○れ○に○空○を○加○へ○て○五○大○と○な○す。畢○竟○四○大○に○物○質○變○化○の○循○環○を○示○す○も○の○に○し○て、空○は○其○物○質○の○歸○着○を

謂ふなり。換言すれば物質は滅して空となり、空より更に物質の生じたる理を示すに外ならず。是れを常任壞空と云ふ。常任とは物質の存在を謂ひ、壞空は滅却して空に歸するを示す。蓋し佛教の説は如レ斯、而して其空の本體こそ更に研究を要する一大怪物たり。空！空と無とは全く別物なり。無より有は生ぜず、物質の出で來る空、其空は決して無的空にあらず。眼是れを看ること能はず、手是に觸ること能はず、而かも一種の魔力あり、電氣の如きか然らず、エーテルの如きか然らず。ラジウムノ本體乎、然らず。勢力！大勢力にして一種の力是なり。此力は無始來の存在にして無終の恒存物なり。空氣は十八里氛氣外に存在せずと謂ふも、此勢力は是れ宇宙間に充滿す。佛教是れを譬へて三千大千世界に瀾淪す

と稱す。而かも此勢力は増減なく生滅なし、般若波羅密多心經に、舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色云々と説くもの是なり。

科學者は、エーテル、エツキス光線、ラジウムなるものは、各能く物質を透射するの力ありと説くも、此勢力たるや尙是以上の作用をなす。即ち物質を創造するのみならず。其物質中に勢力は存在す。換言すれば、此勢力の結合する所物質となり、勢力の去る所忽ちにして物質集合力を失ひて滅失す。假令ば草木の枯れて土灰となり、人間死して土化するが如し。佛教は是れを四大分離と謂ふ。又其物質と勢力と二にして不二なるを、心經に舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色云々。又引寄せて結ばば草の庵にてほとけ

は元の野原なりけりと。予は此空を名けて勢力と謂ふ。學者の所謂エ  
 ネルギーなる可し。名は實の賓なり何にてても可なり、此勢力は、單  
 に物質を生ずる元子の元子たるのみならず、其物質を結合せしむる  
 魔力を有し、茲に草木國土乃至虫魚禽獸人間として活躍せしむ。即  
 ち草木に花を咲かし、禽獸をして叫ばしめ、人間をして意思を相通  
 せしむ。其靈妙なる動作は、畢竟此勢力の發露なり。人間は是れを  
 靈魂と稱す。人間の此活動を靈魂と名くるならば、獸の吼へ禽の囀  
 る。草木の花を着け實を結ぶ等、之れを靈魂と謂はずして可ならむ  
 や。人間の作用は多少完全にして、他の木草禽獸は機器の不完全な  
 るのみ。其勢力の發露する點に於て何の差別か是あらむ。佛説是れ  
 を形容して、草木國土悉有佛性と謂ふ。又草木國土悉皆成佛とも稱

ふ。此佛性又は成佛の義解は後に詳論す可き題目なるも、兎に角、  
 物質活動の原理は茲に根據を有す。

以上の勢力が、實に魔的作用をなすとは、次第に是れを説かむ。抑  
 も此勢力は、創造する者無くして存じ、始めもなく、終も無く、不  
 増、不減、實に相對を離れたる絶對觀なり。古來是れを造物師と名  
 づけ、神と謂ひ、不可思議となして、到底吾人の思想を以て此以上  
 を研究すること能はずとす。只不可知的とせん、其不可知的こそ即  
 可知的なり。佛教に於ては種々の名目を附す、眞如と謂ふもの此本  
 體に外ならず。此勢力は草木國土を生み、之れを活動せしめ、叫ば  
 しめ、歌はしめ、舞はしむ。蓋し無より有を生じたるにはあらず、  
 靜より動を起したるにもあらず、勢力は恒存なり、有なり、有より

有を生ず、何の沒道理かあらむ。無形有形を現じ、有形無形に入る、何の不思議か是あらむ。物質の元素に歸し、元素更にラジウムに歸し、ラジウム終に勢力に歸するのみ。物質論者の所謂物は、幾百萬分しても物なりとの定義は、今や科學のエネルギー説の爲めに破られ、而て其エネルギー説は、更に佛教四大循環原理に依て、遠く證明せられし舊説たりしにあらざるや。

### 一 六大と物質

説明の順序として、以下聊か佛教所説の六大を解釋せざる可からず、六大とは、地水火風空識是なり。佛教には是れを六大縁起論として説く、各宗派に從て、多少其見所を異にするも、六大の論理を否

認するものはあらず。時に之れを四大五大と謂ふも、實は四大は唯物に流れ易く、五大も亦然り、六大説に至て始めて識の作用を謂ふを以て、茲に物心一元の哲理を證明するを得るなり。其物心一元の本體を指して、一如、如々、眞如、法界、或は大日法身坏、千種萬態の形容を附す。佛道の行者は、須らく先づ是れを看取するを要す。禪道の修行も亦、此境に同化し、假りに死境に到るを試む之を大死底の境とも、又涅槃の境に到るとも謂ふ。

予の佛教觀は以上の如くなるも、同一佛教中にも、俱舍論の如き物心二元を立て、一の業因力を其根本に立つるものなきに非ざるも、畢竟是れ小乘にして、物心二元を打破して一如的に至るものにあらずんば、其實大乘佛説として、釋迦の眞理と觀る可からず。即ち物

質の有を説くも不可、無と説くも斷見に墮す、各外道の邪説とす。眞如の實在を認めて以て中道の實相とす。俱舍論の如きも實は全くの二元説にはあらず、其業因力なる一種の作用を認め、其業因力は以て物心を創造すると云ふに至ては、其理論大乘の一元に歸す。畢竟方便的の所説と解して可なり。予は大膽にも、佛教は其所説、大乘小乗の別なく、其眞理を同一にして、只所説の方便を異にするのみと斷言せんとす。本書禪を中心とするにも係らず、殊更に禪のみに偏ぜざるは、蓋し禪は禪として凡ての佛教々理を排斥す可き性質のものにあらず、否寧ろ悉く其教理を研究するの必要あるを以てなり。只禪家の宗匠たる者、教相上に工夫を求むるは、修行上に有害無益なるを以て之れを嫌忌するのみ。

夫れ佛説は一元たり、然れども時に二元を説くとあり、是れを有爲法と名づけ、或は極端なる唯心論に傾く所説あり、之れを無爲法と謂ふ。二者共に偏見たるを免れず、俱舍の如きは此偏見に座す、即ち現在には有爲即色を以て説き、過未を無爲即心を以て解せんとす。されど是れ佛教解釋の楷梯として、止むを得ざる所説と見る可く、大乘に至ては、天台華嚴禪の區別なく、均しく事々無碍事理無碍の理を説き、物心一如、色即是空を觀破す。佛教に於ける物質觀は、以上の如く夫れ現實的なり、實在的なり、而かも唯物論にあらず、唯心論にあらず、二元論にあらず、實在にして而かも空なり、空にして而かも無ならず、一種の力的實在なり、力とは何ぞや眞如なり、法相なり、法海なり、阿頼耶なり、識なり、大日なり、其力の働さ

の方面より見て阿頼聊と名づけ、業因力と稱ふ。又其實在の方面より、之れを法海、法相、眞如等と云ふ。通俗的に之れをエネルギーと名づくるも可なり。

### 一 物質の本體

是より更に、歩を物質界に轉じて、其本體を究めむ乎。吾人の眼耳鼻舌身に感觸する物體は、果して一の眩覺なりや、將た又實在なるやの疑問は、既に現今更に研究の餘地あらず。何となれば、此現象は實在なり、夢にもあらず眩にもあらず、眞實なり、かゝる證明は哲學者を待たずして、科學の能く立證する所たり。佛教者亦之れを否認す可きにあらず、特に俱舍論の如き然り、科學者又物質の不滅

を説明して曰く、物質は、たとひ幾千萬分するも、其終に原子に達して止まざるのみと。科學者の研究範圍に於ては然らむ、何となれば夫れ以上に涉る時は、科學の域を脱して、終に哲學的領域に侵入するを以てなり。然れども、最新科學者は其研究の結果、終に力的作用を認めて自己の領域とするに至る。ラジウム說エネルギー說の如き是なり。佛教の如きは、同じく物質の不滅をも説き存在をも認むと雖も、殊更に物質と名づく可き物と、勢力と云ふ物質の本體たる無形物の間に區別を認めずして、直ちに色即是空と解す。予は如斯物の存在を認むるも、其物の本體は勢力なり、心魂なり、不可思議なりと謂ふ。普通の二元論者は、茲に物なる永恒の存在物ありて、其他に尙一の造物的作用即神の存在を認めて、恰かも人形師が



人形を造るが如く、土は人形と現し、破壊して原土に歸し、始終循環して、其物質の恒存を説くも、蓋し之れ大なる謬見にして、世人形師なるものあることなく、土なるものあることなく、又人形なるものあることなし、本來は一の力的作用のみ。其力的作用が土と現じ人形と現じ活動して吾人の眼に見ゆるなり。是れを譬へば、尙力は濕性の如き乎。濕氣は眼是れを見ること能はざるも、水と變ずる時は形態を具す。更に動を起して波となれば、以て或る作用を爲すに至る可し。本來は一物にして三者各別の物にあらず。佛教の所説中、天台宗の如きは、此力的作生を眞如とし、眞如は濕性の如く、心は水の如く、物は波の如しと説く。予の譬喩と大同小異其謂ふ意は一なり、色即是空空即是色と云ふも尙同一なり。蓋し凡ての佛教

は説を茲に一致す可きなり。豈獨禪宗のみ此理論に反せんや。參禪の徒かゝる理論に妄念を驅らるゝ時は、所謂禪定を得るに難しと雖も、大死一番實究す可き玄海は茲にあり。今一層平易に之れを解釋すれば、物質は一の勢力の化合物なり、勢力化して物質となれるなり。勢力の他に物質の存在なく、物質は畢竟勢力の眼に見ゆるものなり。恰かも濕性集て雲となり、冷却して雨となり、洋洋として注て大海となり、怒濤を起して岩石を碎くに至れるに均し。夫れ斯の如く、物質は勢力の固なり、勢力化して物質となりたるが故に、物質と勢力と二者並存するにはあらず、勢力と物質二にして不二、物質は色勢力は空、空即是色、色即是空、波即是水、水即是波、水と波とは別物にあらず、禪定百年なりと雖も、即身即佛の理

此○意○義○を○度○外○し○て○他○に○求○む○可○か○ら○ず○。○さ○れ○ど○注○意○す○、○禪○は○境○を○得○を○  
以○て○目○的○と○す○、○か○ゝ○る○着○語○を○念○頭○に○浮○べ○て○は○成○佛○す○る○に○難○さ○を○。

### 一 物質の靈動

説○明○の○順○序○と○し○て○、○茲○に○物○質○の○活○動○す○る○大○原○理○を○説○明○せ○さ○る○可○か○ら○  
ず○。○然○ら○ず○ん○ば○、○世○人○の○多○く○は○夢○想○せ○る○、○心○靈○は○活○物○な○る○も○物○質○は○  
死○物○な○り○、○死○物○を○以○て○造○り○た○る○人○形○に○活○靈○を○容○る○故○に○活○く○る○な○り○、  
一○度○物○質○破○滅○す○れ○ば○、○忽○ち○靈○氣○遊○離○し○て○所○在○を○異○に○す○と○の○論○を○打○破○  
す○る○こ○と○能○は○ず○。○古○來○哲○學○者○、○宗○教○家○、○悉○く○皆○惑○へ○り○。○獨○り○佛○教○の○  
主○義○に○於○て○、○其○誤○謬○に○墮○せ○さ○り○き○、○殊○に○禪○定○に○依○て○、○得○た○る○見○界○に○  
從○へ○ば○、○打○成○一○片○、○本○來○の○面○目○に○歸○還○す○る○の○自○在○を○得○る○は○、○蓋○し○此○

理○の○實○證○な○り○。

夫○れ○物○質○の○活○く○る○は○、○畢○竟○其○根○元○活○動○せ○る○勢○力○の○結○果○な○れ○ば○な○り○。  
勢○力○化○し○て○物○質○と○な○れ○ば○と○て○、○活○動○力○を○有○す○る○勢○力○が○死○物○と○な○る○も○  
の○に○あ○ら○ず○。○物○物○皆○活○く○可○き○等○な○り○。○抑○も○、○勢○力○即○ち○、○眞○如○は○、○宇○  
宙○に○恒○存○す○る○作○用○に○し○て○、○其○作○用○の○一○種○と○し○て○自○動○力○を○有○す○。○換○言○  
す○れ○ば○、○勢○力○は○自○動○を○常○に○な○さ○ん○と○す○る○も○の○な○り○。○未○だ○物○質○と○し○て○  
凝○結○せ○ざ○る○以○前○に○於○て○は○、○其○自○働○力○を○認○む○る○に○、○立○證○の○方○法○困○難○な○  
り○と○雖○も○、○勢○力○よ○り○生○じ○た○る○物○質○が○活○動○す○る○を○見○て○、○其○勢○力○の○自○動○  
作○用○を○有○す○る○を○知○る○可○し○。○是○れ○恰○か○も○、○地○球○或○は○太○陽○に○引○力○な○る○力○  
の○存○す○る○と○の○立○證○困○難○な○る○も○、○物○の○墜○落○す○る○を○以○て○之○れ○を○證○し○、○天○  
體○の○運○行○す○る○に○因○て○其○引○力○あ○る○を○知○る○が○如○し○。○斯○の○如○く○勢○力○は○、○自○

動力を有す。而して其自動力は種々たる靈妙不可思議なる作用をなさしむ。即ち勢力の凝て人間となるや、意識として情的作用を呈せしめ、禽獸草木と變ずるや、各其特殊の作用をなさしむる類是なり、佛說是れを阿頼耶識と別名を附す。蓋し勢力の本體を眞如とすれば、阿頼耶識は其作用のみ、別に二物存在するにはあらず、然れども其不可思議作用と自動力とは混ず可からず。自動とは動靜の動にして、靈妙作用とは活殺の活の字に當る。斯の如く、勢力は活動作用と靈妙作用とを有す。故に凝ては物質となり、散ては勢力に還元す。還元しては永く潛勢力として活動し、集ては物質として顯勢力として活動す。豈又不可知的作用ならずや。かゝる理は、天門學者既に立證するに庶幾し。曰く太陽先づ生じ、皮層散じて地球となり、月球

となり、星辰と化すと、是れ眞理なり、事實なり、然れども太陽は何れより生じたるやは科學者の説明完全ならず。太陽として熱の生じたる以前は未だ説を聞かざる所なり。又太陽が自轉を始めたは何故なるやも詳説あるを知らず。然れども、予は是れが解釋を與ふるに勢力の自動作用を以てせんとす。即ち自動作用によりて凝て氣體を生じ、其氣體は自動作用によりて熱を生じ、熱は液體となり、液體凝結して固體となりたるなり。佛説の地水火風空の五大は、蓋此順序を説明せるものなり。科學者も亦謂はずや、地球月界の太陽系と分離せる時は未だ液體的のものなりしが、其表皮冷却して茲に始めて固體となりたるなりと。予も亦此説を容るゝと同時に、以上の所説に符合して相背馳せざるなり。疑ふこと勿れ、勢力の物質と化

するを、疑ふこと勿れ、勢力の自動作用を、疑ふこと勿れ、物質の  
更に勢力に還元することを。

### 一 物質の自存力

縁に應じて色と現じ、空と滅すること、恰かも電光石火、忽ちに生  
滅するが如し。然れども、物質の勢力より生じ、更に勢力に還元す  
るの状は、吾人有始有終的思考力を以てすれば、餘程の長時間を  
要するに似たり、されど宇宙の對絶觀を以て之れを見れば、石火電  
光の一瞬間たる可し。彼の朝に生じて夕に死する蜉蝣を見ずや、彼  
れの終生たる十二時は、吾人の六十年間に價するに非ずや。吾人の  
終世たる六十年を、宇宙の對絶より觀れば又復た斯の如きのみ。物

質の生滅夫れ以上の如く速かなりと雖も、物質は一度茲に生ずるや、  
更に縁に因て自存する性を有す。學者此一端を以て直ちに物質の不  
滅を云爲する材料とする所なり。されど、這は大なる誤謬にして、  
人形師の人形を造るや、其人形壞する時は更に其土を以て再び他の  
人形を製造するにあらず、土は終に勢力と消へ終る。新たに人形を  
造るには、更に勢力もて土を造り而て後人形を造るなり、曩の土と  
今の土とは別なり。かゝる觀念を根本的に會得せざれば、終に唯物  
的に流れ、或は二元論を立つるの止むを得ざるに至る。豈是れ佛説  
ならむや、又夫れ眞理ならむや。宜しく眼光を宇宙に放つ可し、宇  
宙は實に廣大無邊にして絶對境なり、其空間に羅列する辰星中の一  
點光を、地球なりと稱し、吾人の世界なりと誇る、豈大洋中の一孤

島にも比す可けんや、其地球の表面に座して、宇宙の大部分は地球を以て満されたるが如く考へ、自己に都合能く常識に任せて宇宙を解せんとする、唯物學者の眼光も亦狭少ならずや。又有始有終の相對觀を以て、其物質の本來を窮むる能はずして、止むなく物質の存在を、永恒なりと斷定する二元論者も亦哀れならずや、然れども、茲に實に奇妙なる道理が行はるゝことに注意せざる可からず、勢力凝て一度物質となるや、其物質は可成的永久に存在を求むることは是なり。是れ蓋し、科學者始め哲學者の大部分が、物質の恒存を夢むる原因なり。物質は夫れ永久に存在を求むる性質を有す、否物質自體にはかゝる性質あるに非ず、他の作用、即ち因縁の力は以て物質を其まゝ他に利用するを以て、物質は永く留まりて形狀を具するな

り。詳言すれば、物質は因果律の支配の本に集散するものなるか故に、其律にして行はれずして止まんか、物質は終に物質として存在すること能はずして、終に勢力に歸らざる可からず、然れども、一方に於て勢力より生ずる物質あるが故に、物質が不増不減の如く見ゆると雖も、實は生滅時なく行はれて、其分量に於て常に同數量の感あり。されど子細に之れを測度するときは、必らず其分量に於て増減するものなりと謂はざる可からず。見よや吾人の身體は、或る緣によりて之れを子孫に傳ふることある可しと雖も、若し吾人何等の因も無く縁もなくむば、子孫として傳はる可きものなくて、茲に一段我と云ふ物質は終を告ぐ。肉體は終に元素に還り、元素は更に勢力に歸せむ。されど時として、別の因果關係は、吾が死體を支配す

ることありて、猛獸の爲めに食はれて猛獸の肉體と化して存在することもあり、草木の肥料となりて永く樹木となりて存在することもあり、かゝる因果律が行はれて、物質が物質として循環して止まざることあるも、直ちに是れを以て物質は恒存なり、永久の自存力を有すとは解す可からざるなり。何となれば、色は常に色として相續することあるも、亦空に歸することもあればなり。佛教語を以て之れを壞空と謂ふ。佛教に於て生滅と謂ふ字義は多く此意味に用ゐられたり。生とは、空より色の顯はれたるを指し、滅とは色が空となるを謂ふ。然れども曩にも度々注意せる如く、生と謂ひ滅と謂ふも、決して無より有の生したるにはあらず、空は實在境なり無にあらず、色と現すること決して不思議にはあらず、是れを通俗的に

説明すれば、勢力は無形なり、空なり、而かも實在なり、畢竟勢力は物質の母にして、物質は勢力より生ず。佛教に於て不生不滅と云ふは、物質の不生不滅を指すに非ずして空を指すなり。其空か不生不滅なるを謂ふ事にして、勢力恒存の理を示すなり。然るを佛教家にして、往々此理を悟らず二元論に墮すもの多し。以上は説明上、便宜の爲め平易に斯くは述べたるなれど、禪的に之れを謂へば、實は勢力と物質の二者ある可からず。生滅の事ある可からず。物質即勢力、物質と勢力は二にして不二、色即空空即色、生死解脱の理論抑も茲に理を酌む。

一 物質と因果律

夫れ物質の恒存力を有するは、一定の因果律に支配せらるゝものあるが故なり。因果律は、物質も勢力も皆一様に之れを支配す。勢力の化して物質となるも、物質か物質として存在するも因果律なり。即ち因果律は有形無形の上に行はる。其次第は因果を論ずる機會ある可きを以て、後に了解するを得可し。即ち物質が永久存在を求むるの性あるは、畢竟するに此因果律の物質を支配するが爲めなり。因は果を生じ、果更に因となる。因果相續止む時なしと雖も、因果の關係は縁の結ぶ所となりて連續するものなれば、其所縁一度茲に失すれば因は果を生ぜずして止む。此時に於てか、物質は既に物質として存在すること能はざるなり。是れを實際に考ふるも其然るを知らむ。吾人の人間といふ因は、或る所縁に従て子孫といふ果を生

ずるも、或る事情の本に縁無きに至らば、茲に因果の相續絶斷せざるを得ざる可し。凡ての物質も亦又如斯、されど吾人の目劇する如く、草木禽獸、苟も現在する物質は、其有情となく非情となく、其上に因果の運行絶へずして、次第に繁殖複雑に趣く如く夫れ丈、縁は絶へず、因と果を結ぶことに勉むが故に、一度生じたる物質は、吾人の想像の及ぶ範圍に於ては恒存するものなり。是れを物質恒存の法則とす。誤解すること勿れ、物質は太始より物質として存在し、集散離合のみ是れ事とするものに非ず、物質は必らず勢力より生じて勢力に歸するものなり。只其道中に於て物質か他の因果作用の爲めに存在するのみ、因果の相續絶へて忽ち空に歸す。されど注意す、物質壞空の狀は、忽焉として滅するものに非ず、其生ずる

や幾千萬年を経て来るあらん、其滅するも或は同時間を要せん。生じつゝあるものは活くるなり、滅しつゝあるものは死せるなり。

一 草木國土悉有佛性

更に、茲に佛説の草木國土悉有佛性なる文句を借り來て、物質の活ける理由を述べ可し。佛教に於ける佛性の義は、是れを種々の解釋を爲し得可しと雖も、かゝる解説は之れを措き、予の見界を以てすれば、佛性とは佛になる性質、即ち佛になる種のことなり。佛になる種とは、元の勢力に歸するを謂ふなり。平易に謂へば、草木國土は此佛となる種を有す。即ち之の勢力に歸還するものなりとの義に外ならず。何等の難有き言葉にもあらず。草木國土悉皆成佛と謂ふ

も同一の意義なり。若し夫れ、世間は以上、の解釋を與ふるならば、只語の形容に過ぎずと知る可し。

成佛の義既に然りとすれば、何時に於て成佛するか。曰く。物質の活動茲に静止すれば、既に靈動作用に止む。否物質は活きるか故に物質として存在す、物質にして活動力を失へば、直ちに物質たる形を失ふて、元の勢力に還るものなり。只直ちにとは謂へ、千歳或は幾万歳をも費やして還元することあらんも、這は宇宙の絶對時間より打算すれば、吾人の一瞬間の生滅なる可きは既に是れを述べたり。物質動靜、其理甚だ複雑なりと雖も、之れを要するに、物質には必ず自動力伴ふものなり、只各其位に住して活動するのみ。譬ば人間の人間として活動するは呼吸期間を指す、されど、物質の活動法



則よりすれば、再び草木の肥料となり、禽獸の飼食となることあれば、永く此世に活動するの時ある可し。是れを第二と活動期と名づけん。佛教に於ける成佛の義は、予の所謂終極の還空にあらずして、其第一期の因縁を離れたる時を示すこと多く、未來の再生を説くは第二期に他の物質として留まる形變物を指す。世俗行はるゝ三世相と稱する書に、人間の過去を種々の木火土金水に比して、山の土、途の草杯取り留めもなきと記すれど、這裡の消息を譬喩を以て漏らすと見れば、又多少の眞理なしとせんや、

### 一 佛教の宇宙觀

宇宙とは何ぞや、曰く絶對世界を謂ふ。即ち吾人の跨れる地球を、

恰も波上の一葉舟の如く乗せる大洋に均し。大洋は地球の表面に極限せらるゝも、宇宙は限界なき絶對界を指す。吾人生來より今日に至る迄、地球てふ一の極限せられたる相對世界に住するが故に、絶對と云ふ想像は容易に自得し難しと雖も、實際に於ては、十を三にて除するも割り切れざるの數あり、此理を推せば、世に無限大の絶對境あるを立證し能ふ可し。又仰て蒼々たる天を望むも其際限無きを目劇するに非ずや。佛教に於て三千大千世界と形容し、數の無窮なるを恒河沙杯と名づくるは、何れも無限大を形容せる語なり。苟も、哲學者宗教家を以て自任するものは、第一義として此絶對觀を悟らざる可からず。此絶對世界の存在を認めざる可からず。然る後に非ざれば、到底眞理を談す可からざるなり。

想へ、吾人の跨れる地球は、實に天界に一異彩を放てる、一の糟星ぬかぼしに外ならざるに非すや。心を地球以外に放ちて、宇宙を一瞥せよ、仰て大となし俯て廣しとする太陽地球、乃至月世界其他の星辰は、實に是れ大洋上の一孤島にも價せざる、一黒子點にあらずや。物質中に頭を挿入して、其研究に醒おきる者は、物質を以て宇宙の大部分を構成するの觀をなす、斯の如き者は、恰かも一滴水に寄生せる微菌ばいじんが、自己の周圍を以て宇宙なりと考ふに異ならず。豈小天地を夢むるものにあらずや。科學者は、吾地球の太陽系より分離せる以來、歴數を以て算す可からざるものとなし、太陽の光を失するの時も亦歴數を以て數ふ可からざるものとす。然れども宇宙の絶對觀、即ち有始無終觀を離れて之れを見る時は、蜉蝣の旦に生じて夕に死

するの短日月を、彼れは永久なりと考慮するに均しかる可し。太陽地球の生滅も亦然り、嗚呼人間一生五十年、斯く考へ來れば、夫れ蜉蝣と何ぞ撰ばむや。是れと同じく、吾人は此雙手の掌を以て掩ふ可き大の、頭骨中に包藏せる腦力を以て、宇宙の眞理を自得せんとす、即ち不完全の腦力を以て、宇宙の眞理を探らむとする、夫れ難い哉、されど某博士の所謂神は人を最後に造りて、此一大著述を讀了せしめんと欲すとは眞乎。吾人は此秘書を讀む可く眼鏡を附與せらる。明歴々として讀了すること容易なり。其法二あり、一は結跏趺座せきけん以て一隻眼を以て觀るなり。又一は、推理腦力の判斷に依るもの是なり。前者は禪が本領なりと雖も、文字を以て一語を着するに由なし、寧ろ第二の法に依らむ、蓋し歸する所一なりと雖も、安心立

命を得る法門は前者に優るものならず、請ふ實參實究、此秘書を讀め、吾れは以下第二義門に下りて宇宙の秘を啓かむ。

抑、佛敎に於ける哲學觀は、是れを宗派の上より見れば、其所説各異なるが如き觀あり。即ち、俱舍宗、成實宗、華嚴宗、天台宗、三論宗、法相宗、日蓮宗、禪宗等、實に多様多觀にして、各自其所見を眞理として、互に相駁論すと雖も、予を以て是れを見れば、畢竟一にして、決して眞理に於て矛盾するものに非ず。只其所説の方法を異にするのみ。即ち眞言の六大に重きに置きて眞如を説くあり、俱舍の現世界の實在を認めて、五蘊十二處十八界等の論に重きを置くあり。其他有爲を主張するあり。無爲を主張するあり。現象を説くあり。實在を説くあり。千態萬狀、恰かも別宗教の如く然り。さ

れど之れを子細に研究し去り、考案し來れば、是れを統一して釋迦牟尼佛の一音聲に歸するを得、要するに實大乘の眞理に到達して、全く以上の偏執を離れ、中道の實相を看破する時は、茲に眞如の明月一切の迷雲を排せん。若し然らざらんか、單純なる一宗教としては、効力を有するとある可きも、哲學的に佛敎の眞價を顯はすべき文明的宗教とするに足らざらむ。

予の觀る所の佛敎は、其宇宙を論ずる最も精にして、古今の眞理を觀破し、最近西洋哲學の所説に符合す。即佛敎には眞如の實在を説く。眞如とは何ぞや、曰く勢力即 エネルギー是なり。エネルギーの宇宙に充滿する如く、眞如は宇宙に瀰綸して餘空あることなし、山河大地草木禽獸、悉く是れ眞如の發露なり。禪的口調の生れぬ先の

親とは蓋し是を謂ふなり。又眞如は、其作用實に靈妙にして、自動力を有するが故に、自ら物質となりて活動し、或は更に種々の靈動作用を與ふ。佛教の八識と稱ふる作用の如きは是れなり。八識とは、眼耳鼻舌身の作用を五識とし、第六意識、第七末那識、第八阿頼耶識是なり。八識の解釋の如きは、今茲に略す。普通佛書之れを詳解せざるはなし就て看る可し。其八識の作用中、殊に阿頼耶識と名くる靈動作用は、是れを宇宙の心靈とも稱す可く、或は大我とも名づく、此阿頼耶識は吾人の心靈と宇宙の心靈と共通す、禪學者の天地に參同すると謂ふは、畢竟此小我と大我の同化せる境を謂ふなり。佛教家此識を以て眞如に對立せしむる者ありと雖も、是れ其本體を辨ぜざる誤解にして、實は眞如の働きに過ぎざるなり。八識以下の

識の如きは、此阿頼耶より來る作用なれども、之を竊かに研究すれば、肉體なる物質の作用にして、直ちに眞如の作用とは見る可からず。佛教家特に禪家に於ても、六識以下を以て妄想なりとす。自覺す可きは宇宙の心靈なり。宇宙の大我なり。宜しく小我を捨て大我に同化せよ。宇宙の心靈に歸りて永く生きよ。生死解脱の法門此以外に是ある可からず。

一 因果の法則と宇宙

既に宇宙の勢力作用を看たり。眞如の實體をも聊か研究したり。是より以下因果作用を説かむ。嘗て述たるとあり、因果律は眞如の作用にはあらず、眞如は此因果律の作用を受くと。實に然り、宜しく

眞如と因果とは是れを別々に考究す可き別作用なり。

嗚呼釋迦一世の大發見は、夫れ此因果律の法則にありと謂ふも過言にあらず、因果の法則は單に眞如を左右するに留まらずして、宇宙の道理は悉く皆此法則に漏るゝことなし。是れを倫理觀を以て抽象すれば、後章述ぶるが如く、道德法則となり、物理的に説明すれば、科學の原則となるが如し。扱て因果は何れの時に於て始めて行はるゝに至りしか、此間に對しては、佛敎は無始來の因と説く。即ち因果は無始終なり、因の因、果の果を求むるも、終に極む可からざるを謂ふ。斯の如き觀は、實に彼の絶對的思想を以て考究するに非ざれば、到底能はざる所にして、相對眼を以てすれば或は云はむ、是れ無始無終にはあらずして、人知の達せざるが故なりと。然

れども是れ絶對境を悟らざる幼稚觀たり。因果の無始無終なるは以上の如し、而て其因果法則は甚麼。曰く因果は互に相續して其終る時無きは、草木果實の互に因となりて窮極なきが如し。佛敎之れを因果相續、又は其連續の狀態を看て、結鎖聯環と謂ふ、結鎖聯環とは、環狀のもの二あり、相互に連鎖をなすが如きを、因果の連續に喩ふなり。因は因、果は果として二物なり、故にこの環球とす、相互に縁によりて連續す、然れども縁を離れては是を分離す可し、是れ又この環球あるが如し。譬ば茲に一の栗の實ありとせんに、此實は萌芽を生じて樹木となり、遂に果實を生ず。曩の栗は因にして後の栗は果、樹は縁なり。種子と果實とは別物なれども、縁によりて連續す。佛説に常に因縁果の三體を説く、蓋し此意味なり。人或は

誤解して、因あれば必ず果あり、果あれば必ず因となると信ずるものあり。因ありと雖も縁なくんば果の發することなく、因果茲に絶ち。恰かも茲に生類あれば子孫と云ふ果次第に相續す可き筈なるも、所縁無くして止まんか、一子を得ずして止む可きのみ。されど因は常に果を生ぜんことを求む是れ因果の特性なり。恰かも物質に自存の性あるが如し、否物質の自存力も、畢竟物質を支配する因果に相續の特性あるが故なり。夫れ然り因は常に果を得んと欲すと雖も、果を得るには須らく縁に椽らざる可からず。縁は畢竟偶然の出來事のみ、因に必らず伴ふものに非らず、俗に偶然の遭遇を因縁と謂ふも蓋し這般の解釋なる可し、因果の道德を如何に支配するかに就ては、予聊か腹案を有す後に述ぶることとせむ。

因果律以上の如しと前提して、聊か宇宙の依て生じたる所以と、其未來を詮究せんとなす。抑も宇宙の因て來りたる所、其去る所甚麼、此大疑問に對しては古來一大快斷を下せるものあるを聞かず、先づ科學者の説を見よ、科學者は物質の存在を前提として、其太始に瓦斯を認め、次に火熱を生じ、飛散する所日月星辰なりと説き、其物質互に引力ありて自轉公轉の作用をなすと。其所説敢て不可なるに非ずと雖も、疑問の解決としては、他に幾多の未解決の問題を殘留す。即ち先づ、物質の存在を前提とすること、及び熱團は如何にして生ずるかを説かざるにあらずや、予は此問題に對して左の如く答へんとす。

曰く、勢力なるものは自動性を有す。即ち勢と動とは常に相伴ふも

のにして、動と勢とは一瞬間も離る可らず、動は勢力の固有性なり、  
 勢力の潜む所動必らず是れに伴ひ、動の發する所勢直ちに是れに附  
 隨す、勢力の靜かなる時は吾人眼之れを見る能はず、手是れに觸る  
 こと能はずと雖も、自ら發する所の勢力は、即ち凝て山河大地と  
 なり、動ては萬物を活躍せしむるの作用を呈す。今顯勢力の一斑を  
 銃砲に試みよ、砲丸元より死物なりと雖も、之れを發砲すれば以て  
 鐵板を貫く可し、何が故に一箇の鉛丸能く鋼鐵を貫くか、只一の勢  
 力なる無形の力只是れに敵するのみ。然らば其勢力は何に依て起る  
 か、只一の動あるのみ。動愈々急なれば勢益々急なり、動も勢の關  
 係夫れ斯の如し、然れども此場合の動は火藥なる他動的の動なり、  
 故に宇宙の理を是れに比す可からずと雖も、勢力に自動力あること、

地球天體の自轉公轉の原始に遡て考ふれば思半に過ぐるものあら  
 む。茲に注意す可きは、以上只勢力と謂へるもの、曩に所謂エネル  
 ジー、或は眞如と名づけたるものと、聊か趣を異にせること是なり。  
 前者は宇宙に彌綸せる實體空を指し、後者は其潛勢力の發顯せる抽  
 象的作用を謂ふなり。

科學者も尙如上の原理を否認せずして曰く、宇宙の原始は先づ活動  
 して、始めて茲に空氣即瓦斯を生じ、此物質の活動は遂に熱力とな  
 り、液體となり、太陽地球月界と次第に分離せりと。佛教の六大も、  
 亦地水火風空識の順序とす。常住壞空は、物質の到來及還元を謂ふ  
 なり。科學者も亦天體地球破滅の期ある可きを説く、全く根據なき  
 説にもあらざる可し。

以上○の○所○説○を○約○す○れば、宇宙は一の眞如の實在と、因果の法則の支配に外ならず、換言すれば、眞如即勢力は因果の支配を受けて活動す。其活動に自動と他動とあり、其自動は終に宇宙の物質を創出せり、其順路は、勢力の自動に始まり、瓦斯即ち佛教の風を生じ、熱之れに加はり、液體を變じて固體として、茲に現界の發露となれり。宇宙の物質は夫れ斯の如くにして來れり、而も動は益々盛なり。動の加はる所勢茲に集まり、勢の集合する所熱度を加ふ。而て熱は更に動の原動力となり、互に相循環す。即ち動は熱を生じ、熱は動を起す、動く所熱あり熱ある物必ず動く、熱度の冷却するに従て動亦緩ならざるを得ず。動の緩なる所熱亦冷却す。科學者の曰く、地球の動くは地熱による、地熱は地の動に依て冷却せず、されど熱は

種々なる事情の元に飛散して減退するが故に、動力自から緩ならざるを得ず、地熱全く盡くる時地動も全く茲に止むと。夫れ然り、動力の盡くる所勢力茲に休す、勢力の潜む所物質空に壞す、即ち宇宙の物質活動を休止せば、眞如に還元す可きは嘗て屢々之れを説ける如し。然れ共、更に或る縁に應じて眞如の自動を始むるや、兩ひ物質を造る可し、物質の生滅は宇宙の自存と何等の關係なし、物質の生滅は幾轉變あるも、宇宙の宇宙たるは無始來より無際限に至る迄委然たり。宇宙は時間に於て永恒、空間に於て無量なり、佛説の生滅の根據は、其原理を茲に探る、吾人幾生死の循環あるも、我は宇宙と共に永久に生く可し換言すれば吾人の小我に幾集散あるも、宇宙の大我は委然として存す。我等の未來は、此絶對境なり。



## 一 動の大原則

動に一定の原則あり。古來學者の説かざる説にして、予の創説たるを憚らず、又佛説に何等の關係あるに非ずと雖も、聊か其是非を世の識者に問ふのみ。曰く勢力に二あり、顯勢力潛勢力是なり。此顯勢力は發して動となり、潛勢力は潛みて靜かなり、動に二の進路あり、左旋右旋是なり。右旋は積極的動の行路にして、左旋は消極なり。進む、發す、飛ぶ等の動は積極にして、其反對は消極なり。請ふ是れを日月星辰の運行より、天然自然の作用は風水電氣の活動を始めとして、宇宙一切の事々物々に試みて其眞理なるを悟る可し。予は斷言す、宇宙間凡そ動く者の法則は以上の二作用に歸せざるな

きを。其陰陽の螺旋に轉回する詳細の説明の如きは茲に論ず可き性質のものにあらず。只動を論ずるに際して筆端岐路に趣けるのみ。又此眞理は現在世にもあれ、或は未來世にもあれ、豈一人の知己なしとせむや。

## 一 宇宙の心霊

宇宙に一大心霊ありや、蓋し千古の一大疑問なり。同じく宇宙に大心霊ありと説くものと雖も、其心霊の見界を各異にす。或は其心霊は吾人の意識の如きものなり、自觀して後是れを識る可しと。蓋し有神論者、無神論者を抽くと數等なり。然れども心霊を吾人の意識の如きものなりと謂ふに至ては、蓋し大なる誤なり。此説は、恰か

も法律上法人は人格あり。法人の人格は吾人に人格あるに均しと謂ふに全し。而るに何ぞ知らむ、法人の人格は擬制的附與なるを。良しや或る論者の如く、法人に人格自然的存在すると假定するも、國家なる法人は吾人と同じく、喜怒哀樂の情あるとなく、意識あることなきにあらずや。吾人の意識と宇宙の意識とは猶斯の如き乎。次に、吾人の靈魂は吾人の意識と別なるを悟らざる可からず。佛敎に於ても既に第六意識と謂ふ。實際の靈魂は第八阿賴耶識なりとす。意識とは、喜怒哀樂を司る煩悩妄想に外ならず、明鏡臺裏の塵點に均し、かゝる妄想を除き塵點を拂ふて而て後、皎々皚々として明月の如く清淨無汚のものあり、是れを實際の心靈となす。何等の作用をなすものにあらず、此靈魂と宇宙の靈魂とは、同一根元なり、

母子の關係あり、否同一物なり。曩きに小我と名づけたるものは吾人の心靈にして、大我と稱するものは即宇宙の心靈なり。共に八面玲瓏なり。さりとて淨と名く可からず、垢汚と稱す可からず、心經の不生不滅不垢不淨とは此謂なり。佛敎は此吾人の心靈と宇宙の心靈と同化するを、涅槃とも、寂滅とも謂ひ、其境を淨土とも極樂とも形容す。

夫れ、宇宙の心靈は、吾人の心靈と同一體同一根なる者を説けり。されども、宇宙の心靈は吾人の意識の如き作用を爲すものに非ざるは、上來の説明によりて判斷することを得む。即ち吾人の意識は、肉體といふ物質の反對作用によるも、宇宙には吾人の如く肉體に比す可き機關なし、尙吾人の心靈は肉體あるが故に宿ると考ふるは不

可なり。吾人の心靈は、肉體の存不存に因て何等の影響なし、宇宙の存在せん限は無業に存在す。是れ恰かも、籠鳥は籠の破滅によりて死するものに非ず、寧ろ廣大なる天地に飛躍するを欣ぶに均しからず。吾人の肉體と共に滅するは意識なり、是等の詳細は後に述ぶることある可し。夫れ宇宙は意識なし、故に宇宙に喜怒哀樂の感情なく、只一定の公平なる因果律によりて自動するのみ。活動するのみ。之れを是れ宇宙の心靈と謂はゞ云ふ可き乎、宇宙の心靈夫れ斯の如きのみ。而るを神を説き天を説く、名は實の賓たり其本體を見ること、果して斯の如くなりや否や、恐らくは予の心靈の如きものには非ざる可し。蓋し其説の來る根元は、因果律の行はるゝ法律と眞如の作用の靈妙なるを考究せざるに起因す。嗚呼宇宙の本體は夫

れ眞如たり。之れが作用は即ち心靈たり。吾人の根元亦眞如たり。之れが靈魂亦宇宙の心靈と同根なり。天地と同體にして同根の吾人歸する所夫れ其本乎。吾は故郷に還りて永く梵天に生き死せざるなり。亦一大樂土ならずや。極樂淨土とは爰なり。西方十萬億土豈遠きに求めんや。

## 一 佛教の人生觀

吾人は何れより來りて何れに去るものなりや、是れ千古の疑問にして、凡ての宗教は此疑問を根據として起ると謂ふも敢て過言に非ず。基蘇督一派の宗教は之れを神の造るところにして、再び天國に去て永く生くと謂ひ、佛教は前世より來りて、未來極樂淨土に去ると謂

ひ、儒教は生を知らず何ぞ死を知らむと謂ふ。其神とは如何なるもの、前世とは如何なる所と詮究して行けば、千言萬語を闘はずと雖も、終に不得要領に歸す。さりとて儒教の如く、生死を知らずと遁辭的に説かざるも本意無けむ。請ふ暫く之れを説かしめよ。吾人の肉體は父母なる縁によりて生じたるには相違なしと雖も、其父母の父母は如何と次第に推究し、進化論者の説も容れ、生物學者の説も容るゝ時は、茲に猿猴時代ある可く、「アミーバー」時代もある可し。斯くて次第に其原始に遡れば、實に單純なる一物質に外ならざる時代ある可し。吾人は是等の科學家の説を是認せざる可からず、故に吾人の祖先は單純なる一物質たりしに相違なし、然れども其物質は如何にして活動を始めたる乎。是原因に就ては聊か語を費さざる

可からず。

吾人が我なりと名づけて、常に喜怒哀樂を逞ふしつゝある者は、抑も是れ何ぞや。猿猴時代にありては一猿猴、「アミーバー」時代にありては一の「アミーバー」なりしにあらずや。其物の向上したる今日より見て、吾人を萬物の靈なりと自尊し誇ると雖も、「アミーバー」時代の吾人として考ふる時は、一の無機物にも髣髴たる一非情物に外ならざりし。斯く隔絶せる物に譬喩せざるも、吾人嘗て竹馬の友として交遊せし者に、偶々相會することありとせん、其凡てに於て多少懸隔なき能はずと雖も、彼れは目に丁字なく吾れ少しく學ぶの差あるのみ。其幼稚の時代に於ては今日の田夫野人と何の差違ある者ぞ。實に吾人は犬猿と兄弟なり、虫魚と姉妹なり、草木と従兄弟

たり、博愛平等主義亦是より起る。

曩きに述たる如く、草木國土として現れる物質は、活動力を有するも、組織に於て有機物の如く、其機關の不完全なるが爲め情的作用を有せず。故に此點を比較し來れば、吾人と同朋たりとの語多少不可思議に聞ゆ、されど人間に賢愚の差別あるのみならず、甚だしきは白痴不具者にして多少人間に遠き者ありと雖も、是れ吾人の同朋にあらずや。草木國土は吾人の姻族としては血縁遠きのみ。

吾人は自觀して以て我なりと謂ふ。然れども其出生の始に遡つて考ふる時は、未だ肉體として認む可きなく、生命として感ず可きなく、禽獸なく草木なし。只一の空あるのみ。勢力あるのみ。所謂眞如の外一の物質あるなし。眞如より物質の來る理は既に宇宙を論

ずる時に詳述せるか如し。吾人父母未生前の本來の面目とは、畢竟此心靈即ち此一大眞如海を指す。物質は夫れ此心靈の抱合せるものなれば、客觀に於て物質と心靈とは別なるに似たり、されど此心靈以外に物質と名づく可きもの無き筈なり。物質生じたりとて、宇宙に一物を添へたるにあらず、心靈の一部の減少せるにもあらず、心靈の本體たる眞如は、不増不減の恒存物なり。譬ば花瓶に挿む木に、花を着け實を結ぶことあり、花と實は別に増加したるにはあらず、花瓶の水と木の一部の變化したるのみ。物質又斯の如く花となり實と變ずる毎に、其名稱と形狀を異にするも、實は水の一部と木の一部に外ならざるなり。

眞如は、夫れ活物にして能く自動す。其自動の結果たる物質も自動

活動くわつどうするは當然とうぜんたり。其有様そのありさまより見て是これをし生命せいめいと云ふ。生命せいめいを有ゆうするもの豈あろけう有情物じやうじぶつのみならん、非情的無機物ひじやうてきむつ亦活動またくわつどうせざるものあらんや。只發露ただはつろの上うへに於おいて其趣そのおもむきを異ことにするのみ。是れ嘗かつて物質ぶつしつの活動どうを説とくに當あたつて説とける所ところなり。人間は夫れ斯ごとの如ごとくにして來る、其去る所亦同一いならざる可べからず、眞如しんじゆに還元くわんげんす、彼の生せいは寄よなり死し歸きなりとは偶然ぐぜんの語ごにあらず、能よく這般ぜんぱんの消息そくしに通とほずと謂いふ可べし。佛敎ぶつぎやうに於おて過去こくわ現在げんざい未來みらいを説とく、過現未こげんみの三世さんせいは、別べつに三所さんじよの空間くわんかんにあらず、恰たつかも明日あした今日けふ昨日けふと別日べつじつの到來たらいに非ひず、同一どうい太陽たいやうの同どう一地球いちちきうを照てうすのみ。時ときの觀念くわんねんを以もつて三世さんせい、或あるは昨けふ今日あしたと稱いふのみ。吾人われは此三世このさんせいを通じて無窮むきゆうに存在そんざいして滅めつせざるなり。眞如しんじゆに生せいじ眞如しんじゆに座ざして眞如しんじゆに歸きる。何れの所ところにか又死後生前あつちのうしろのまへの場所ばしよがあらん。

宇宙うちう以外いがいに宇宙うちうなく、現在げんざい以外いがいに三世さんせいなし、吾人われ滅めつして只涅槃ぢねはんの空くう海かいに入り永とこく生せいくるなり。是れを成佛ぶつじやうと云ふ。草木國土そくぼくこくど、凡たゞを物ものとして夫れ成佛ぶつじやうせざるものあらむや。

### 一 佛敎の生死觀

吾人われの生せいと謂いひ死しと稱いするものは抑おさも何なにぞや、曰いはく一言いっごんにして之れを謂いへば、肉體にくたいの生滅せいめつのみ。其母體ぼたいより分離ぶんりするを生せいと名なけ、呼吸こくわつの靜止じやうしを以もつて死しと謂いふ。人間にんげんとして此世界このせかいに生せいする以上いじやうは此二このふたの兩極りやうきよくを有ゆうす、生死せいしとは此二このふたの關門くわんもんに向むかて名なけたる話わなり。然しかれども子細こさいに研究けんきゆうすれば、人間にんげんの生死せいしと生滅せいめつとは、是れを區別くわつべつせざる可べからず。生死せいしは、有始有終いうしいうしゆうの兩極りやうきよく、殊ことに人間にんげんを以もつて之れを謂いへば、五十

年間の意識作用の動靜を指すが故に、到底吾人遁る可からざる關門なるも、生滅といへば、吾人生するものにあらず滅するものにあらず。吾人の小我は永く大我に歸して亡せず、吾人の肉體は出生以來既物質として存在し、滅後更に縁を求めて現世に永く留まることあらん。何れの所にか生じあらんや。佛教は此後の意義を觀破して、以て人生の慰藉安心を教ゆる法門たり、只凡夫をして導き易からしめんと欲して、其形容潤色に過ぐることあるのみ。識者は此理を看取して直ちに解脱す。禪は更に之れを、實見的に修じて、先づ心身脱落に始まり復活に終る。理と事と更に相碍ぐる無きに於て確信更に大なるものあり。是れを得道の士と稱す。

## 一 靈魂とは何そや

靈魂の本體に向ては、今日尙種々なる空想を以て迎へられ、未だ何等の答案を與へたるものなし。予は此大問題を解決するに佛教の眞理を以てせんとす。されど佛教の小乗教義に於ては、多少説を異にするが故に、或は予の説を以て大に誤謬なりとする者無きを保せずと雖も、眞理は是れを曲ぐ可からざるを如何せん。人常に想像すらく、靈魂とは吾人の智情意の作用なりと、而て靈魂の人體に宿るは、尙旅客の宿泊するに均し、人體茲に生ずれば靈魂直ちに宿り、死すれば去て空中に游離し、或は天國に或は西方十萬億土に、全く別天地の境に浮遊すと。斯の如きは古來今日に至るまで唱導迷信せら

る、所にして、此思想を根據として凡ての宗教起り、哲學布演せらる。然るに近世に至て唯物論者は、靈魂を解すること全く機械の反射作用とし、機關の破損は直ちに靈魂の靜止となること、猶時計の機械の憂々として運動するに均しと。此説は吾人の意識を以て靈魂と解せば或は可ならむ。されど如何せむ靈魂は意識にあらざるを。試に思へ、吾人は此肉體を有し、眼は見、鼻は嗅き、舌は味ひ、身は觸るの用具となし、耳に音聲を聞て悞み、舌に美食を嘗て美味を感じ、皮膚に刺劇を受けて痛痒を感ずるにあらずや。若し此の機械にして破損するとあらむか忽ちにして何等の感を起すこと能はざる可し。况や吾人の腦髓は、至て微妙なる作用によりて、種々なる思考力を有す。喜怒哀樂の情の如きは、此肉體の反射作用にして、意

識と謂ふもの畢竟此作用に外ならず。依之看之、肉體の滅する所何等の意識作用あらむや。若し夫れ智情意の作用を靈魂なりとすれば、予は斷して謂はむとす、即ち肉體の滅する時は靈魂亦滅する時なりと。此説果して是なるや否や、余は斯の如き單純の理論に安ずること能はず、意識を目して靈魂なりとは佛教に於ける教義に反す。古來此種の誤解絶へざるが故に、參禪の徒をして第一着に戒むるに此差別を以てし、是れを煩腦と名づけ、妄想と呼び、悟入の妨碍物となして蛇蝎視する所以なり。

然らば、靈魂とは如何なるものなりや、曰く一言にして是を云へば、吾人を活動せしむる勢力是なり。吾人の活動作用は此靈魂の作用なり。死とは活動を靜止するとなり。勢力無き所活動なし、活動無き



か故に靈魂と名づく可き作用去るなり、去て何れにか往く、何れにも行かず宇宙の勢力に同化するなり。然らば宇宙の勢力と吾人の勢力とは別物なりや、曰く吾人の肉體を支配する上より自觀して我と云ふ。自我小我とも名づく。然れとも其宇宙に存する勢力は吾人の勢力と別にあらず、大我と名づく。吾人より見れば客觀なるも、宇宙を心として自觀すれば主觀的なり。禪の禪たる此大我に同化するに始まる。三界我有。三界唯心。這箇の消息のみ。果して然らば、吾人の靈魂は吾人の專有物にあらずして宇宙の靈魂なり。宇宙の靈魂の借用物なり。肉體も又宇宙の物質の借用物なり、吾人或る因縁の到來に依て、以上の借用物を返濟す可き義務を有す、是れを假りに死と云ふ。

### 一 死後靈魂の状態

死とは、即ち小我の大我に歸するを謂ふ。古來總ての人の誤解するは、吾人死後靈魂の状態是なり。即ち甲乙丙丁死して自我を離るゝ時、甲乙丙丁の靈魂は幽界に浮游して別所に散在して、容易に散消せざるものと爲す、蓋し或る小乗佛教の方便説に基くものならむ。若し夫れ、斯の如く靈魂は自由に吾人の肉體を出入するものとすれば、人間の死亡數と、出生數とは常に平均せざる可からず。出生數多きを加ふれば、其不足數の靈魂何れに之れを供給す可き乎。豈斯の如き奇怪のことあらんや、迂説信するに足らず、佛教の眞理は實に千古を照らす、吾人の心靈は宇宙の心靈に歸するのみ。天に參じ地

に同ずとは、宇宙一體を謂ふのみ。涅槃に入り、法海に寂すとは、蓋し是れを謂ふ。常住壞空も時に此義に解せらる、佛教の第一義、只箇中の消息を説くのみ。

吾人の肉體は、物質を説くに當て其勢力より來りたるを説明せり。勢力は物質と變し肉體となりて活動す。活動の方面より見て靈魂とし、物質の方面より見て肉體とす。肉體と靈魂とは決して別物にあらず、故に禪に於ては即身即佛と謂ふ。即ち此身此肉體が、直ちに佛なりと云ふ。以上の見界の他解す可からず。又是心是佛と謂ふも、即ち此靈魂たる本心、自我、勢力の活動（意識にあらず）が佛なりと謂ふなり、他義ある可からず。即身即佛と、是心是佛とは別にあらず、肉體と心靈と別にあらざるを云ふのみ。平易に云へば、物質は

勢力の凝結物、勢力の本體は靈妙の活動力を有す、故に物質は活動力を有するなり。吾人の小我と名づくるものは此活動を指す、吾人人類の小我自我と名くる靈魂も、此肉體を離れては未那識を通じて、意識の活動を始むること能はず。未那識とは第七識にして、第八阿頼耶識と第六意識との交通を司る識を指す。故に肉體無き所宇宙の大我の外小我あることなし。夫れ小我は、既に肉體を以て本據とすれども、大我は即ち然らず、大我と名づく可きものは、宇宙の心靈、詳く謂へば勢力の作用を謂ふ。不生不滅不汚不淨を以て體とす。吾人は此大我を以て吾人の心靈とせざる可からず。否吾人の心靈は此以外に決してあることなし。佛教に大我を水とし、自我を水上の波に譬ふ。本心の茲に存するを認むるを悟と云ふ。悟るものは本心

を○知○る、本○心○を○認○む○る○の○は○自○我○を○輕○ん○ず。自○我○は○肉○體○と○生○滅○を○同○  
ふ○す○と○雖○も○大○我○は○然○ら○ず、無○始○來○よ○り○無○終○極○に○涉○て○恒○存○す。之○れ○を○  
不○死○の○本○體○と○云○ひ、是○れ○を○不○滅○の○境○と○云○ふ。生○死○解○脫○は○蓋○し○此○以○外○  
に○あ○る○可○か○ら○ず。

## 一 死後の實驗法

死○後○の○靈○魂○は、果○し○て○上○來○説○く○が○如○き○も○の○乎。佛○教○に○於○て○是○れ○を○實○  
驗○的○に○立○證○す○る○の○方○法○あ○り。單○に○立○證○方○法○の○み○に○あ○ら○ず、自○認○自○得○  
し○て○以○て、轉○迷○開○悟○の○手○段○と○し、安○心○立○命○を○得○せ○し○む。禪○即○ち○是○な○  
り。座○禪○と○は○何○ぞ○や、是○れ○を○平○易○に○謂○へ○ば、肉○體○を○生○き○な○が○ら○殺○す○  
に○あ○り。即○ち○自○殺○を○試○む○る○に○あ○り。死○し○て○而○て○後○の○靈○魂○の○本○體○を○認○

む○る○に○あ○り。其○方○法○は○座○禪○儀○杯○に○述○ぶ○る○が○如○く、結○跏○趺○座○す○る○こ○と○  
な○り。結○跏○趺○座○と○は、先○づ○右○の○足○を○以○て○左○の○股○の○上○に○安○ん○じ、左○の○  
足○を○以○て○右○の○股○の○上○に○安○ん○ず。半○跏○趺○座○は、但○だ○左○足○を○以○て○右○の○股○  
を○壓○す○な○り。寬○く○衣○帶○を○繫○け○て○齊○整○な○ら○し○め、次○に○右○の○手○を○左○の○足○  
の○上○に○安○ん○ず。左○の○掌○を○右○の○掌○の○上○に○安○ん○ず。兩○大○拇○指○を○面○へ○  
て○相○柱○つ、乃○ち○正○身○端○座○な○り。左○に○側○り○右○に○傾○き○前○に○躬○り○後○に○仰○ぐ○  
こ○と○を○得○ざ○れ、耳○と○肩○と○對○し○鼻○と○臍○と○對○せ○し○め○ん○こ○と○を○要○す。舌○は○  
上○唇○に○か○け○て○唇○齒○相○ひ○着○け、目○は○須○く○開○く○べ○し○と。是○れ○は○之○れ○座○禪○  
の○形○式○に○し○て、斯○く○す○れ○ば○と○て、直○ち○に○見○性○し○能○ふ○も○の○に○は○あ○ら○ざ○  
れ○ど、此○方○法○は○以○て○煩○惱○を○遮○斷○す○る○に○最○良○手○段○た○れ○ば○な○り。詳○く○は○  
座○禪○用○心○記、普○勸○座○禪○儀○杯○に○就○て○見○る○べ○し。斯○の○如○き○法○は○如○何○な○る○

目的を以て爲す可きや、曰く吾人の肉體は地水火風の四大の凝結物なるを以て、一々之れを其元に還す法なり、而して後如何なる境界に座するや、禪語に四大分離の時甚麼、或は大死底の時甚麼、畢竟這箇の消息に向て問ふの語なり。其境界は其實験を待て後知る可く、一語の添ふ可き辭なしと雖も、秘密なく謂へば、凡ての煩腦を絶息して靜かに座する時は、思慮なく分別なく苦なく樂なく、虚念悉く去て實念玆に現じ、天地に參同して宇宙是我なるを覺ふ。是れを之れ大死底の境と云ふ。此大死底は實際の死境と何等の差別あることなし。死後の淨土は是なり。死後の極樂は爰なり。古來死人死境を説かずと雖も、吾人は生ながら、以上の法に依て死境を驗するを得、彼の睡眠中の夢境や、眩暈者の半境とは聊か其の趣を異にす。佛教

殊に禪宗に於ては、如斯實驗的に死後を立證して以て空論空想を排し、眞乎に安心せしむ。故に此境界に出入自在を得るの士は、實際の死に臨ても遲疑の念生ぜず、迷想の起ることなく、莞爾として敢て狼狽あることなし。生死を離るゝとは此義なり。永く活きて死せざるの法只此一あるのみ、千言萬語は一の實驗に加かず、禪の禪たる特徴は蓋し玆に存す。即ち禪は只境を得るを目的とす、學ぶ可き法なく教うべき手段なし、要は結跏趺座して自得するにあり。以心傳心、教外別傳、不立文字とは此謂なり。

### ○一 佛教の倫理觀

吾人は何故に惡をなす可からざる乎。聖人の教へあるが爲か、然ら

ば、聖人は何を標準として、道德を吾人に教ゆるか、人或は曰はむ、畢竟是れ方便のみ人爲的のみと。夫れ或は然らむ、而かれども時を異にし所を異にするも、其道德の方針大凡一定し居るは如何。蓋し多少の根據無きを得ざるなり。他は暫く措く、佛教上の倫理觀を以て之れを解せば、慈悲觀と因果律の二法則に従ふのみ。前者は他に向て施す方針にして、後者は自己の爲めに守る可き準則たり。勿論佛教の最大目的としては、即ち轉迷開悟、安心立命にある可し。安心立命は、生死を解脱するに在り、轉迷解脱は、安心立命の手段たり、然れども以上は箇人主義、即ち各自の幸福を目的とするものにして、人と人と關係、即ち社會主義にはあらず、語を替へて之れを謂へば、倫理とは現世に於ける平和を目的とする、吾人の行爲の標準なれば、

箇人の安心立命のみに關する問題は生ぜず、只倫理は何を標準として之を遵守す可きやに歸す。於是予は、是れを慈悲と因果の眞理に遵ふ可しと云ふ。佛教に於て吾人に示す所の倫理觀は、畢竟此二法則を出でざるなり。此二法則は以て演繹すれば宇宙の一大法則となり、之れを歸納すれば吾人の行爲の一大準則となるを斷言す。然らば、吾人は何が故に此慈悲主義と因果律を守らざる可からざる乎。曰く、慈悲の念は博愛より起る、博愛とは、自己を愛すると均しく他を愛し、自他の間に差別なきの謂なり。然り、其博愛の念は平等より來る、平等は、差別に對する語にして、宇宙一體主義に歸因す。宇宙一體の主義は、勢力の一元説に基くなり、勢力の一元論は、既に物質論に於ても、宇宙論に於ても既に詳論したるが如く、

「エネルジー」即ち眞如の一元を指す。吾人は此眞如の來りて眞如に去る、而て其去來するや、因果律の法則に遵ふことも既に之れを述たり。因果律は、宇宙に存する確定不動の眞理なり。吾人の先づ確信せざる可からざる眞理は、眞如の實在と因果律の存在是なり。夫れ眞如は平等空なり、吾人の來るも去るも此空海なり。吾人のみならず、宇宙の萬物は、均しく是れ吾人の同母兄弟のみ、吾人の分身のみ、顯れて斯く差別となるも、潜みては無差別なり。宇宙萬物夫れ既に一體なりとすれば、吾人と他人との間、乃至宇宙萬物との間に於て何ぞ差別の觀を以て不公平のことある可けんや、此一體の宇宙觀を法海とも、佛海とも、又佛陀とも云ふ。故に此佛陀より見れば、一切の有情非情は皆是れ赤子なり。基蘇督教の神の宇宙の萬

物を見る猶斯の如くならん。故に萬物は神の子なりと説き、博愛主義を鼓吹す。佛教は夫れ形體的神を認めずと雖も理は一なり、基蘇督教の博愛佛教の慈悲主義偕に眞理なり、佛教中此佛海を靈的に説くせうせうせう小乘教ありと雖も、畢竟方便説のみ。名稱を大日如來、又は不可思議光如來しぎこうにやらいなどよ杯附して、其靈妙作用を信仰せしめんが爲めなり。吾人の過去は佛陀なり。未來も亦佛陀なり、現在豈佛陀ならざらんや、佛陀とは謂へ、彼の神的靈物にあらず、眞如のみ、勢力のみ、「エネルジー」と名くるも尙可ならん。此平等觀は、要するに博愛主義、慈悲主義の根底なり。

次上因果律に向て少しく研究する所ならむ、釋迦牟尼佛の一大發見は、蓋し此因果律の法則ならむ乎。吾人の倫理觀として遵奉す可き

は此因果律なり。又畏怖す可き法律は此因果律なり。因果の存在と其法則に付ては、既に是れを説けり。茲には只倫理觀として聊か述べらる所あらむ。吾人の此世界に出現したる以上は、其一舉一動因果の支配を受けざるはなし、茲に出するも因と縁あるに依る、死する亦然らざらむや、行爲にして善因とならば、結果に於て善果なる可く、惡因なれば惡果なる可きは、炳焉として火を視るより明かなり。未だあらず、惡を爲し其惡報を受けざるもの、未だあらず善行を爲して善報を受けざるものは、故に曰く積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありと。又曰く、天網恢々疎にして漏らさずと、眞理なる哉語や。然れども熟々世間の状態を視るに、實際に於て惡人榮達し、善人却て苦惱を受くることあり。因果若し斯の如く歴然た

らば天何が故にかゝる沒理をか爲す、此問題に對して、古來快斷を與へたるものなし。西哲「ライブニツ」氏曰く、此世界に罪惡の存するは、此世界をして善に進ましむるの要具なり、且つ吾人日常經驗する所にすれば、惡人却て善果を得、不正の者却て幸福を得、善人却て罪禍にかゝるか如きことあるは、現前の短かさ時間に於て考ふる時は以上の現象あるも、哲學或は宗教等によりて、永遠無窮の時間の上に是を推究せば、此疑問忽ち氷解することを得可しと。然れども、現在の状況を以て未來を推測する時は、或は未來と雖も現在の如く、善に禍し惡に幸するか如きことは決して之れ無とも謂ふ可からず。何となれば、若し未來氏の云ふ如き神ありて、善惡公平の賞罰あるならば、神は未來のみならず、現世と雖も同様に神

の監督する世界にあらずや。されば、現世に於てかゝる不公平の賞罰なりとせば、未來も亦同様の不公平に墮することなき乎の疑を生ぜん。氏は更に此疑問に對して曰く、現世に於て、善に災し惡に幸することなきに非ざるも、惡人幸を得るものも、善人幸を受くるものと比較する時は、惡を爲して幸を得るもの、數極めて少かるべし。故に人は善をなすときは、之に應ずる善果あることを豫期して、其心に安ずることを得可し。且つ世界は何ぞ此一小世界に限らん、世界は無數なり。其無數の世界中には、寸善必らず其賞を得、尺惡必らず其罰を得ることあるを想像することを得可し。其想像は以て吾人の心を安ぜしむるものなり。故に善人は賞せられ、惡人は罰せらるゝことは、實に世界普通の道理にして吾人は善を爲すと

時に、其心に不期の安逸を得、惡をなすと同時に、其心に他人の知らざる不安を感ずるは、亦賞罰の一部と謂ふ可しと。予は此論の一部は眞理なりとして是認するものなり。即ち、其惡果なるものは、必らずしも是れを客觀的にのみ想像す可からず。語を替へて之れを謂へば、惡報とは肉體的苦痛のみによりて測度す可からず、財貨の富貴以て幸福とは爲す可からず。宜しく、「ライブニツ」氏の如く、主觀的に苦悶する所を以て惡報なりとす可きことあり。人爲的の法律に於ても、刑罰の時効、即ち公訴の消滅、或は期滿免除を規定するは、一種の主觀的苦痛を以て、既に刑の執行に優れる故なりと説明する者あり。亦如上の主義に説を同ふするに似たり。又時の永久的觀念を以て説明するに、幽界に涉ての未來は予直ちに首肯する能はざる



も、之れを肉體的系統によりて考ふる時は、一因の果を生ずる數世の後に生ずることあり。譬へば茲に惡疾の血統をとじて子孫に残すことありとせんに、數代の後に於て必らず發生することあらむ。是れ惡因の惡果永遠の後に來るの一例とするに足る可し。斯の如き自然の道理は、到底之れを否認すること能はざる所にして、神の賞罰に歸すと雖も、神佛に依てかゝる裁判權の行はるゝものにあらず、畢竟因果律の作用のみ。孔子も亦脩を造るもの夫れ後無からんと謂へり。是れ又、因果作用の子孫に傳はるを意味す。依之着是「ライブニッツ」氏の永き時の觀念を以て結果を定むるも亦一の眞理たり。無論佛教に於ては、此因果を三世に涉て相續すと説く。

### 一 因果律の例外

上來の疑問を解決するには、到底「ライブニッツ」氏の所説を以て満足し能はざるものあり。何となれば、因果の正しく行はるゝは眞理なりと雖も、彼の惡人榮達して善人逆境に沈底することあるは、蓋し免れざる事實なればなり。予は此疑問に向て、到底佛説を正面より解釋しては、解決に苦しませざるを得ず。何となれば、佛説としては、善因善果、惡因惡果に例外を示さざればなり。然れども、裏面解釋としては、嘗て述たる如く、因は必らず縁に依て始めて果を得可く、何等の縁なき所果ある可からず。此故にたとひ善因ありと雖も、縁にして逢はざるか、或は惡縁なることあらんか、其果善なる

能はざる可し。譬ば茲に善良なる種子ありとするも、之れを下すの地味悪く、或は培養の法宜しきを得ざさんか、到底善果を得ること能はざる可し。况や風雨災害をや。此理は則ち、因果必然の一大例外を爲す所以なり。縁は偶然に遭遇する事實なり、されば善因必ずしも善縁に遭遇するに限らず、惡因にして善縁に遭遇することも屢々之れあるを想像するに足らむ。然りと雖も、「ライブニツ」氏の云へる如く、之れを惡人の幸を受くると、善人の幸を受くるとを比較すれば、善人の幸を受くるは其數に於て夫れ多し。是れ恰かも、善良の種子は常に善良の結果あるは、統計の示すに均し。吾人は夫れ以上の如く、僅少の例外を除ては、常に此因果の法則に遵ひ、行爲の準則とせざる可からず。是れ佛教の教旨なり。勸善懲惡の方便

説又茲に原則を酌む。但し此因果の例外説は、予の私論に屬す。

一 禪宗の因果觀

上來説く所、普通佛教の説として、平易に之れを説明せり。されど禪上の見界は更に一步を進むるものあり。昔時百丈和尚談法の時、一人の老人ありて毎に衆に隨て法を聽く、大衆の歸るとき老人亦歸る、或時此老人一人歸らず、師之れに問ふ、面前に立つ者は誰ぞや、老人曰、某過去に此山に住し、學人が問ふに、大修底の人は因果に落ちるや否や、之に答へて因果に落ちずと曰ひき。此見解に因て五百生の間野狐の身を受く。希くば和尚、一轉語によつて、此野狐身を脱せんことを。乃老人改めて問ふて曰く、大修底の人還て

因果に落るや否や。師曰く、不昧因果と。老人言下に大語して野狐の身を脱し得たりと。嗚呼是れ何の謂ぞや、此不落因果と、不昧因果何ぞ其口調の相似たる、されど其意味に於て雲泥の差あるを含まず可し。不落因果とは、因果の眞理を無視したるの語なり。去れば五百生の野狐たる惡果に墮す。不昧因果は、決して因果を撥無したる語にあらず、因果の法に通曉して昧からざるの謂なり。因果に達曉して、解脱したる者は、因果も亦之れを束縛する能はざるの理あり。之れ惡因を轉じて善因たらしむるを得ればなり。畢竟善惡とは其標準主觀的にありて、客觀的に之れを求む可からざるものなり、譬は、人を殺すは必らずしも惡ならず、正義の戦争の如き寧ろ善事たる場合あればなり。

又小慈善必らずしも善因ならざる場合あり。昔時、梁の武帝達磨大師に問ふ、朕寺を起し僧を度す。何の功德かある。磨曰く、無功德。帝曰く、何を以てか功德なき。磨曰く、此れ但人王の小果のみ。帝曰く、何をか大乘の功德と謂ふ。磨曰く、淨智妙圓にして、體空寂、是の如きの功德世に於て求められずと。帝語を他に轉ぜり。客觀的に是れを見れば、武帝の行爲は大なる善因なるが如し、然れども、達磨是れを人天の小果として無功德何等の善果なしと、喝破し去る。世之れに類したる行を爲し、其善果の到來せざるを以て天を憾み、因果信ずるに足らずとする者多し、何ぞ其因果觀の狭きや。

一 禪の處世觀

百  
汎く佛教と稱ふるも、多少其教義を異にするものありと雖も、吾が  
信ずる禪に於ては、何等の儀式を要せず、禮拜を用ゐず、只眞理に  
向て參究するの一途あるのみ。偶々寺院に法式莊嚴あるは、此悟入  
の方便のみ、殊に在俗引導の手段のみ。禪を修する所何の木佛かあら  
ん。何の經典かあらん、禪の教理としては、死後に天堂地獄あるを許  
さず、別て意識的靈魂を認めず、されば幽界に苦もなく樂もなし。  
只此肉體の一部は眞如に還元し、一部は永遠他縁に導かれて現世に  
滯留せむ。其狀恰かも燭火の如し。明滅所に從て自由なり。「燈火の  
消つて何所にかへらん暗きは元のすがたなりけり」と。暗きすが  
たとは果して何ぞ。曰く度々説明せる涅槃境なり。無の境にあらず。  
眞如の實在空境なり。縁に觸るゝことありて再び火の點ずることあ

らん。然れども其時は既に今日の處にはあらざるなり。况や同一の  
人間たる形狀として生ずること蓋し罕なり。佛教に於ても是れ再び  
逢ふこと能はざるの生と謂ふ。吾人は、幸に生を人間に享有せるを  
偶然の縁として喜謝す可きなり。

吾人の去て空に歸するや、只子孫に體の一部を傳ふると、善惡の因  
を残すのみ。人誰か子孫を愛せざらむ。又名譽を希望せざらむ。此  
二者を愛するの念を全ふせんと欲せば、只因果の法則を遵守して善  
因を積むにあり。吾人の宗教は茲にあり、何の儀式をか將ゐん。死  
後に天堂地獄を建て、人の恐怖心を利用して、小乗因果を説法する  
が如きは、既に今日に於ては殆ど陳腐に屬す。更に語を終に残す、  
吾人世に處するの途は。慈悲の心を以て心とし、因果の法を準則と

して、善事是れ勉め、内には禪を修して、安心立命を求むる外是有る可からざるなりと。

嗚呼、記して茲に到る。吾は是れを以て禪書の一部たりと謂ふことを躊躇せざるを得ず。何となれば、禪とは、實際斯の如きものに非ざればなり。禪は苟も一語を添ゆれば忽ち禪に遠かるを以てなり。然れども卷首に豫め述たる如く、近來禪は宇宙の眞理に背馳する、只一種の空想にして、而かも釋迦牟尼佛の所説に反すと爲す者あり。予是を歎ずること久し。故に自ら其第二義第三義に下りて、聊か哲學的に是れを説明して、多少禪の消息を漏らせるのみ。禪は境を得るを以て目的とし、文字言句を以て之れを説くことを許さずと雖も、彼の古來の古則公案を無暗に拈提して人を迷はし、身其境に座せず、

矢鱈に心頭を傾けて悟入を謀るが如き、全く益なき方法に比較すれば、又多少の得る所なしとせむや。

# 茶禪一味 後編

## 一 緒 論

緒 論 あり

予が僑居せるところは、晝さへいとも淋しきに、恰かも梅雨の半にて、庭前の小池には蛙見の呱呱たる聲と、檐端には細雨の滴々たる音のみ聞へて、常にもまさる或心細き夜のとにてありける、只獨り爐邊に坐し、松風の音をのみ伴として、孤燈の下に茶を喫し居りしが、茶釜の穂先きにも劣らぬ程、數々の妄想湧く中に、懷ろに浮み出づるは、いつもの休居士在世の時のこと共なりき。靜かに立ちて燭を執り、漸く探り得たるは、之なむ南坊宗慶老の記録なり、燈を挑みて讀み去り讀み來れば、三百年の往時のとも、今眼前に見ゆる

が如く覺へて、轉た感懐は胸に迫り、雙眼は爲めに濕ひければ、竹  
 葉にも同情ありと見へ、光りも頓みに衰へて、五彩の虹蜨を放ち、  
 松風の音も絶へくんに、四隣寂として慘憺たり。今其一節を抜くに。  
 (前畧)珠光の弟子此頃所々に蜂起し、様々の莊りをして、主人は  
 客を珍らしがりし、夫れを美目にし、誰は此莊をして客を得た  
 るに、其客は何某の弟子なるが、此手前を知らずして赤面しつ  
 る、誰某は此莊をして首尾したり杯いなどこそあり、師をかへ  
 再び出入を絶する類多し、夫れ故に師も亦思ひく様々のとをた  
 くみ出し、法に違へるを教ふるもの、幾何と云ふ數を知らず、  
 十年を過ぎずして茶の道廢る可し、廢るとは、世間にては却て茶  
 の湯繁昌する時分と思ふ可きなり、悉く俗世の遊樂に成り行く

ことを、易に於ては廢ると云ふとなり、其時に至りて永らへたら  
 ば、易は獨り草庵の茶を樂じ可し、誰問ふ人もあるまじ、かなし  
 きは宗易漢和とも、古來なき草庵一風の茶の湯を工夫し、恐らく  
 は彼の趙州の茶とも云ふべしと、自から悟るとなるに、世降りた  
 る故、間もなく道すたる可きと眼前なり、二疊敷も程なく二十疊  
 の茶室に成る可し、易は二疊をしつらへたるさへ、道の妨げかと  
 後悔せり、兎に角ケ様に思ふも茶道の墮落なり、時至て道起り、  
 時衰へて道廢ると、佛界にても及ばざると見へたれば、中々か  
 なしむべからず、又末世に佛の再び生玉ふためしなきにあらず、  
 此道に於て其心得の人後代に出來、御坊や休が志を感服すると  
 もあるべし、さやふの人に薄茶一服手向けられたらば、百年の後

たりとも、亡魂などか請け喜ばざらむ、必らず茶道の守神となるまじき休にあらず、佛祖も力を添へ玉ふ可し云々。此坊もとより同心、其日は天正十七年二月廿八日、其夜和尚も御出てにて、特に御物語しみて闌夜に及びぬる、已に過ぎにし十八年同月同日、横難に逢ひ玉ふ、悲歎するに堪へたり、この坊が回向日々の茶の湯、靈魂まことに請け玉ふべし、又この坊が無き跡も、忌日の茶の湯回向怠りなき様、鑑板に残し置なり云々。又卷末に書して曰く。

文録元年二月廿八日、先師利休宗易大居士三回日、香花回向し茶を供し、多年の夜話閑談を思ひ出し、灯下に涙を落して、つくつくと忘れぬ物語どもを、後と先きと書き付け、已に一卷に及ぶ、

老や執筆の序、小偈成る、上に呈す、只是れ情を述ぶる而已。

孤燈油盡 花纒白 一鼎水乾茶不靑

師去草房三覺夢 東闌報曉淚空零

南坊拜

嗚呼噫々、苟も茶筌を弄し、道の爲めに歩みを運ぶ者、誰か此物語を聞いて、今昔の感起らざるものあらむや、蓋し利休は現世に死して、而かも未だ幽界に瞑せざるもの、又南坊は、集雲庵を去て今尙死せざるものなり。夫れ現今の茶道は、實に所謂茶の湯大繁昌の時、大流行の節にして、而かも其大繁昌大流行こそ、休の所謂茶道衰退の時期にあらずや、現今居士の魂、南坊の魄をして、満足せしむるに足るの法弟、夫れ幾人かある。



予は是れ草庵の一農夫、一郷里の寒居士たり。此農夫、此居士の爐邊に現じて、訴ふる居士の靈が、不肖仙樵をして、聊か茶道に盡すことを促がす所以のもの、蓋し斯道の衰退を挽回せんことを、守護するなるべしと信ず。故に予は徹頭徹尾、積年來の舊習を打破し、以て利休居士の遺志を發揚せむと謀り、曩に大日本茶道學會を興立し、大に斯道數奇者の同情を得たり。今復其茶道骨子を録して、梓に上す。居士の靈をして、聊か慰むるを得ば、吾が本懷達し了するのみ矣。

一 茶道病論

嘗て之れを醫に聞く、凡そ病の人身を冒すに五あり、曰く遺傳、曰

く傳染、曰く感染、曰く流行、曰く特發之れなり。即ち是れ病の人身に侵入する、緣なるものにして、其結果人身を惱ますに三あり。曰く輕性、曰く漫性、曰く急性之れなり、而して其原因を尋ぬるに、遺傳は祖父母或は曾祖より、血統上病根を胎内に稟くるもの、即ち癩病肺病の如く、傳染とは微菌の爲めに傳はるもの、赤痢虎列刺病等の如き、感染とは五感及び神經等に依りて、病氣に感觸するもの、假令ば飲食の嫌惡より起る、腹痛頭痛精神病等の如し、流行とは氣候の作用、或は時期によりて一般に流行するもの、即ち感冒眼病等の如き之れなり、特發は介するもの無きに、異狀を呈するを謂ふ、概ね此五病原を漏れずと。

以上の如く、人身を侵す病に其種類あると斯の如し、豈夫れ茶人に

も病無きを得むや。

抑も茶人の病氣に十數種あり、即ち文盲病、誹謗病、道具狂、庭園病、建築病、諂諛病、高慢病、飲食病、理屈癖、手前癖、潔癖、吝嗇病、隱遁病、貪慾病、道樂病等なり。其内文盲病誹謗病は、既に茶道中興よりの遺傳にして、殆ど慢性なるもの、又道具狂庭園病建築病の如きは、甲より乙に傳染するものにして、就中急性なる流行病なり。復諂諛飲食高慢理屈手前杯の諸病は、師匠より或は朋友よりの感染にして、既に慢性と化し居るもの、其他の吝嗇隱遁潔癖道樂病の如きは、先天的の氣質によりて特發するもの、蓋し輕症と謂ふべし。

以上列記したる、茶人の疾病の容體を述べれば、古來茶人文盲儒者

貧乏とて、茶家の宗匠とか稱せらるゝ人に限り、概して無學の人物多し、例令ば茶席に古徳の墨跡杯懸けあるも、口の内でムニヤクと濟まし、年月日位見當にお時候柄至極杯と挨拶するの類なり、又誹謗病とて、利休在世の時より、甲論乙駁して、自己の流儀を立て、相反目せる餘波は、猶ほ今日に存し、客門を出づるやいな、軸物は贗物で、飯が硬くて汁が冷て居た、手前に落ちがありし杯と誹謗し始むるを、亭主は送り出て壁に耳を當て、聞て居ると謂ふ始末、是れ即ち古來の遺傳病、又更らに茶道の深意を解せずして、道具に萬金、庭園に珍木奇石、建築に華美を盡し、全く不釣合ひをして樂む者あり。此病氣は、競争的に傳染するものにして、一旦此病に罹れば、其倒る者大抵十に八九、實に懼る可きものなり。次に諂諛病は、

巧言令色實意無きもの、高慢は、自分免許の自尊強き人物、飲食病は、茶の湯の極意は懷石料理なりと心得、其取り合せと調理法のとのみを論じ、他の會に招かるゝも。懷石以外に着眼なき者、理屈病は、常に曰く手前は是れ手藝のみ、茶道の意は理論にありとて、只書物或は故實のみ鑿穿する人。手前癖は、點茶法の外茶道を辨ぜざるものなり。當今以上の病人尠からず、感染の懼れあり。其他小慾知足を誤解して吝嗇と化し、茶は隱者の業と思ひて山陰に避遁し、或は、道具屋兼宗匠の貪慾病あり。癩性にて、茶は清潔を主とすとて、何もかも打ち捨て、一心に掃除に凝る茶人あり。此輩は却て山中落葉の自然てふ風情を解せず、又道落にて、一向不潔を無頓着なる者あり。以上は皆先天的の性質より起る病氣にして、治するに難

しと雖も、他に及ぼす弊害は、前者に比すれば即ち輕症なるものなり。

釋尊世に出現し給ひて、衆生皆病ありと曰ひしが如く、茶人夫れ皆病あり。又釋尊は四十九年の說法に依て、是れを濟度せられし如く、利休世に出て、茶道を中興し、大に斯道の爲めに力を盡したり。されど釋迦は滅盡經に於て、末世の比丘、白衣の居士に法を聽くべしと歎息せられしが如く、利休も、三百年を出でず茶の道廢る可しと叫びたり。翻て當今の茶家を願よ、前述の病苦に七顛八倒し、且つ門外漢に馬鹿にせらるゝに非ずや。誰か大偉人の出て、之れを矯正治療せんとするもの無き乎。今にして之れを救濟すると無くむば、遂に道は墮落滅却し終らむ而已。

一 茶道體用論

凡そ天地の間に備はるものは、悉く陰と陽との元則に基かざるもの無きが如く、理論の上に於ても、實際に適用しても、必らず其體と用とを具備せざるものなし。去れば、其體のみありて用なきはなく、用のみありて體無きもなし。體と用とは、鳥の兩翼車の兩輪の如し。例令ば、體は人間の精神の如く、用は夫れ五體の如きもの歟、人間にして、精神のみありて胴體なくんば幽靈に均しく、胴體のみありて、精神無くんば、人形に異ならず。必らずや、體用相待て活動すると、恰かも精神の命ずる所、足之れを運び、手之れに應ずるが如し。然れ共體と用とは、元來二にして不二、不二にして二、

差別にして無差別、無差別にして差別なり。之れ人間の精神即五體、五體即精神なれ共、精神は矢張精神、五體は矢張五體と差別あるに似たり。若し道にしても、體と用と無く、物にしても、體と用と何れを缺くも、圓滿なる道完全なる物と稱す可らず。之れを人間にしては片輪と謂ひ、之れを物にしては、缺け茶碗の如しと稱す可きのみ。

茶道に於ては、殊更に體用の語を以て、一切に論及するを常とす。されば、元より其體と用とは、完全に具足し居らざる可らず。即ち完全なる體と、完全なる用とを具備し居らざれば、決して圓滿なる、完全なる、茶道と稱す可らず。既に茶道は圓滿なり、完全なりと稱する以上は、之れを歩むて危ふからず、之れを行ふて過たざる底の

道ならざる可らず、請ふ試みに是れを茶家宗匠に質さむ乎。敢て問ふ、甚麼なるか是れ茶道の體用。宗匠泰然として答へて曰く、茶味は即ち禪味なり、故に古來茶味禪味同一味と謂ふ、豈禪機を悟らずして茶道を語る可けむや。既に茶祖珠光始め、紹鷗、利休、劍仲、宗旦、各皆大德寺に參禪便道して、辛苦痛棒を喫し、漸く始めてたるものにて、禪を修せざるの人に於ては、何の効果かあらむ、珠光が嘗て義政公の間に答へて、趙州是知己、陸羽豈佳境に到らむやと謂ひしも、蓋し此意なりと。喋々説き去り説き來る。

予曰く、高論聽くを得たり、然れ共、是れ彼の趙州が喫茶去、一休の茶禪一味論のみ。畢竟室内の工夫、自覺、獨樂の茶にして、是

れを喫して衆と共に樂み、以て俗家に應用し、行住座臥に行ふ、所謂世間的の用を爲さず。又利休の和敬清寂の茶意に適せず。如斯を體備はりて用に缺くと謂ふ。余を以て之れを觀れば、未だ圓滿なる茶道として首肯する能はず。試に之れを次に問はむ。

宗匠得々然として、聲に應じて曰く、茶味禪味杯謂ふは、彼の浮屠の我田引水的臆説の甚だしきものにて、茶道を方便にし、注入的に布教せむと欲するのみ。其故は、珠光は元南都の禪僧、利休禪を好み法衣を賜はり、榮西茶子を唐土に齎らし、又有名茶家の墓所大德寺に在るを以て、牽強附會せるものなり。決して本朝の茶書にも、由來禪より出てたりと記せるとなし。抑も茶の道は、敬と禮とを尊ぶ、而して茶會は動作と容貌とを第一とする、是れ即ち敬禮の意な

り。敬を以て内を正ふし、禮義を以て外を方にす。故に茶事は禮を第一とす。看よ服紗を腰に狹みて出て客を迎ふるは、佩玉に代ふるなり。佩玉錚々玉を抱ひて掬躬如たりと謂ふも、是れ禮の容貌なり。又之れを大にしては治國平天下の基となる、禮記に曰く「即ち禮を隆にし禮に因る、之れを有方の士と謂ふ。禮を隆にせず、禮に由らざる、之れを無方の民と謂ふ、敬讓の道なり。故に、以て宗廟を奉ずるには則ち敬あり。以て朝廷に入るには、則ち貴賤位有り。以て室家に處するには則ち父子親み、兄弟和す、以て郷里に處するには則ち長幼序有り、孔子の曰く、上を安んじ民を治むるには、禮より善きはなしとは、之れ此れを謂ふなり」と。夫れ又敬と禮の用大ならずや。茶は即ち敬禮に依て起る、故に茶道とは謂ふなり。茶禪説の

如きは笑止に堪へたりと、喃喃説伏す。

余徐ろに答へて曰く、如何にも茶道の敬と禮なる名論し得て了解せり。甚だ當を得たるもの、如し。然れ共退て考ふるに、敬と謂ひ禮と稱するも、畢竟人に對して而して後、始めて茲に其用を生ずるなり。自から敬し自から禮するとは、出來間敷に非ずや。まして茶は行住座臥の行ひと聞けば、明けても暮れても客を招きて、茶を樂むとは貧者の能はざる所なり。若し茶が果して、來客或は宗廟に奉る時のみに用ふる道具なれば、日々自己の役には相立たぬ道理ならずや。茶道も左様なる日用不用の贅澤なるものにては無かる可し。先づ是れは極端なる議論としても、茶道が敬と禮とのみの道ならば、聖賢の教へに、既に敬禮の法あり。又座作進退の法には、伊

勢小笠原の式もあり。特更六ツケ敷茶の湯をかりて、敬と禮を學ぶに及ばむや。古來禮過ぐれば、詔になると謂ふ、實に今時の茶家の内には、往々巧言令色して、裏面には動作を誹り、器物を嘲る人あり。只專一に敬と禮とをのみ説く時は、かゝる弊風を養ひ易し、豈之れを圓滿なる茶道と稱す可けむや、請ふ更らに之れを次に問はむ。敢て問ふ、如何なるか之れ茶道の體用。宗匠欣然として衣紋を繕ひ、膝を進めて曰く、最前より茲に默聽すれ共、一つも其當を得たるものなし。請ふ暫く吾が説を聞け、茶道は豈禮にのみ關せむや。又禪にのみ與らむや。若し果して茶を禪とすれば、是れ禪學の専門家にして、常に禪三昧に入れる閑暇なる老人、或は僧侶の輩に非ざれば、到底學ぶと能はず。茶若し禮ならば、是れ貴人長者の翫弄のみ。何

ぞ斯の如き狭き道ならむや。茶には、苟くも上王公より下は庶民に至る迄、是れを行ひ以て世に處し、一家團樂の内、安穩に身を終るを體とす。抑も愉快の因て起るは、一家平和に在り一家の平和は家を齊ふるを元とす。家を齊ふるは國の因て治まる所、家を齊へ國を治むは財を以て基とす。財を蓄ふるは儉にあり、儉の道は茶に如かず、故に茶は質素にして儉約の親と謂ふ。利休嘗て佗茶を案出し、之れを四海に及ぼし、質素を旨として風雅の道を示す、即ち小欲知足以て儉を守るの法たり。上は素朴を愛して驕らず、下は儉を守りて足るとを知る、こゝを以て上下一致樂みを同ふす。既に茶の十徳にも上下親交と謂へり。茶道は物足らぬを愛するを元とす、即ち數の調はずして、奇數の道具を使用する故數奇者又數奇屋と稱す、茶

の道も亦世に益すると尠からずと、縷々陳述す。

予答へて曰く、卓説拜聽し、實に茶道の質素儉約を以て主意とする  
と、余輩の如き貧生に取ては、其恩澤に浴して、利益する所尠か  
らず。されど、本來茶の湯の起原を考ふるに、義政公權威の餘波驕  
奢に流れ、既に樂み極まり遊技の道盡き、遂に物數奇の結果、茶法  
を能相珠光に學ばれしなり、故に當時は檜造作の書院金銀縷めたる  
座敷を設け、三幅一對四幅一對に、五具足の莊嚴を盡し、眞の臺子  
に依て唐土より泊載せる名物を玩び、點茶の式を定められたるに  
始まる。而かも利休の侘茶を以て、四海に普及せんと謀りたるは蓋  
し中興のとなり。其法たる眞の臺子を略して臺目疊に改め、缺け茶  
碗を以て名器に使用せられたり。依之觀是、侘は末にして眞の

式は元なり、今日と雖も、貴人長者は宜しく眞の臺子に基きて點茶  
を樂しむ可く、貧賤は宜しく草庵一風の侘茶に安んず可し。各其  
本體の主旨は異るとなし。若し儉過ぐれば吝となり、侘過ぐれば染  
み垂れとなる。宜しく其分に應じて中道を歩む可し、貴説の如く、  
單に質素儉約をのみ茶道の本體と守れば、吝者を出し濡ぼつ茶人  
を養成するの弊あり。茶道豈斯の如き無風流、殺風景の道ならむ。  
上來三宗匠の説、未だ以て、吾が識認する茶道と其軌を一にせず。  
予元より茶道を悟りたりと謂ふにてもなく、只幼より茶を好み、茶  
道の眞理を愛し、聊か佛教の糟粕を嘗めて、以て兩々共に日々參ず。  
され共性來菲才にして且つ寡聞、到底大道を判斷する杯謂ふ程の卓  
見も無しと雖も、妙なるもので、一枝を凝視すれば木の幹を認むる



能はず、山に登れば其全體を見るときを得ざるが如く、茶道に執着すれば、茶道の體には眼の着かぬものなり、聊か執着を離れて、出沒活殺の自在を得れば、一目瞭然に識別するを得ると信ず。因て此眼光に照影する、前三者の説を評せば、以上皆各眞理あり。御尤の説なれ共、悲ひ哉、茶道の體とす可き一部分、或は用の一部分を説き得たるに過ぎずして、未だ圓滿に及ばず、余をして是れを評せしめ、忌憚なく語を下さしめば、三者の説は皆片輪茶人と名づけ、茶道の切り賣説と評せずんばある可からず。何を以て然るか、曰く甲は禪にのみ偏して茶味を説く、之れ大乘妙理解脱門の法話にして、世間的の茶事に暗き論なり。全く茶道の用を捨つ、即ち體用完備せざるの道は未だ圓滿の茶道と稱す可

からず。乙は敬と禮とを説く、是れ用にのみ偏して、彼の和敬清寂の、和と敬とを悟りて、未だ寂なるもの、何たる事を識らざる、所謂世間的小乗なるものなり。決して圓滿と稱す可からず。丙は處世的經濟に重きを置くの論にして、茶道の最下位なるものにして、未だ茶道の體として論ずるに足らず。何となれば、茶を經濟に應用し、家を如何程富有にするも、禮儀を缺き、心身の解脱を得ずんば、愚痴の間に生涯を終らざる可からず。是れ圓滿の定義と評す能はざるなり。

以上の辨疏を再び翻覆するに、何程禮義作法點茶等の法に堪能なりとて、肝心の一隻眼、即ち禪道の悟りに暗くしては、茶を以て安心立命するとも出來ず、さりとて、又禪智識方は、茶道を習はずして

獨り上手に出来るかと謂へば、禪は禪の法、茶は茶の法にて、禪者  
 必らずしも茶人と稱す可からず。茶には禮あり作法あり故實あり、  
 一々皆世間的の應用を爲さざるものなし、果して然らば、予の所謂  
 圓滿なる茶道とは、以上の三者を具備して、更らに其一方に偏せざ  
 る底の人にして、茲に肇めて其體と用とを識るものと斷定せむと欲  
 す。然るに方今の茶家を見るに、多く其用に偏して其本體を解せざ  
 るものゝ如し、予之れを片輪茶人と名づく。本書は専ら其體を説く  
 のみ、儻し夫れ誤解して、茶道とは如斯ものかと早呑込して、客  
 觀的用を顧みざるなくむば、著者の意を了とする活眼の士歟。

## 一 茶 禪 論

本書は専ら、禪を基として茶道を説く。故に茶禪一味と名づく。然  
 れ共、直ちに是れを以て、茶道は禪に外ならず、禪茶以外に茶道あ  
 らずとは早合點す可からざるなり。何となれば、禪的茶道は、實に  
 利休居士的傳の神髓にして、茶道の妙味效能も決して此外に出づ可  
 くもあらねど、茶道は後にも述る如く、而かく狭く解す可きものに  
 あらず。中々廣き方面に涉りて研究を要するものあり。假令は曲尺  
 割の故實、點茶の作法々式、料理懷石の業杯は、一向禪とは關した  
 るものにはあらねども、是れを除外しては茶にならぬを見れば、茶  
 即禪とは一概に稱ふ可からず。されど、以上の諸法を一切離れて  
 禪的に看破したる時は、又別に一風の禪的、茶道なるもの生ず。利  
 休居士も、其眞意を了悟せられたるは、至て晩年のこと、見ゆれば、

他流の茶人が、禪茶を以て外道視するも無理ならず。夫れ以上の如く、茶道必らずしも禪を以てのみ解する能はざるも、禪的、茶道は一切の法則を打擲して、世間法を離れ、禪學修行の爲めに、座禪工夫の方便となり、行住之れを執行して、腦煩を消却するの樂地を得、古來難行苦行を以て修行せざれば、到底得道開悟する能はざるの行爲を易々樂々の間に透過し得るの兩得法なり。是れ予の多年茶禪を主張する所以にして、且休居士の遺志を發揚せんと欲する次第なり。利休の

茶の湯とは只湯を沸かし茶を點て、

呑むばかりなる本をしるべし

と云へる、其本とは何ぞ、此第一義を研究して後に非ざれば、其末

葉は如何に巧なるも、茶道の宗匠とは稱す可からず。其本とは、是れを一言に謂へば、茶に依て、安心立命せん爲めの業なれば、本来の面目の究盡は、茶道茶の湯の本來ならむ、決して之れ茶湯興立の沿革をの尋ねよにもあらず、曲尺割臺子の根元の故事故實にもあらず、實に茶湯は禪的趣味を以て其生命とす、是れを禪的に考究するに非ずんば何れの所にか本を識べき。又曰く

打ち恵みし佛ならでは一枝の

荷葉の花に○○○の花 (○○○文字不明)

釋尊の拈花微笑に依て、正法眼藏を傳へたる摩訶迦葉に比するに、茶道的傳の心法を以てす。嗚呼茶道も亦、八萬四千の大衆啞の如くにして、一人の迦葉を得ること夫れ此の如く難き乎。或は夫れ然ら

む、其南坊に語る所を見るに、

休ノ玉フハ我モ七十二満ル齡ナレバ堅固ナリトテ頼カタシ子供モ  
イマタ茶道未熟ナリ今ヨリ二十年モツトメタラハ器用次第ニテ茶  
ニモナルベシ其此一大事相傳ヲイツレノ子供ナリ臣傳ヘ玉ヘト  
テ印可ノ一卷取出シ云々

噫利休に數千の末弟あり、十哲と稱する達人あり、而かも眼中十哲  
なく、末弟なく、肉身の子孫さへ無く、只一の迦葉としての南坊宗  
啓あるのみ。當時に於て既に傳如レ此、三百歳の後に至て、果し  
て傳燈滅せざるや否や、今の世の茶の湯とて翫ふものは、一種の  
誤樂にあらざれば、婦女子の遊藝に外ならざるにあらずや。休曰く  
露地は只浮世の外の道なるに

心のちりを何散すらむ

三界の火宅を出て、白露の

かゝる所は松風もふく

とかゝる境界を設けて、茶三昧に入るにあらざれば、何としてか其  
元の研究をなし得らる可き、されど予は、三界の火宅を出て、山  
中に入て仙人氣取の茶人となれ杯の、迷はせを進むるにあらず、只  
茶室の如きは車馬往來の街にても可なり。居室の一隅に爐を打ち開  
きたるにても可なり。只自己の心裏を別天地に遊ばせざれば、到底  
茶道の修業とは謂ひ難し、故に曰く

引かこふ簾屏風の只一重

浮世はさてもへだてられけり

とめ得れば心の奥の草の庵を

山深くとはなにもおもひけん

居士は更に又曰く

かへりみよ己が心の鑑板

本の心のありやなしやと

吾人は茶室に入て、研究一番す可き第一義は是なり。

本の心、其本の心の有無の探索は、禪定の要素なり。次に一休は

寒熱の地獄に通ふ茶柄杓の

心無ければ苦しみもなし

と自白せり。嗚呼果して本の心は無に歸せりや否や、一休の自白は

正直なりや否や、吾人此自白を更に研鑽するの價値あるを信ず。茶

室に入て茶柄杓を執る度に起る可き疑問は是なり。居士又曰く

潔きよさいさぎよからぬ皆人の

心のうへの掃除なりけり

庭の面は拂ひもあへぬ松の葉に

中々塵のみへずも有哉

此道に交る人の心をば

ふくさものにぞ成へかるらん

何となく打ちこぼしたる水の音に

心のあかや除とるらむ

けがれたる心の塵の底とりて

人をもしめす和巾灰かな

羽○箒○に○目○に○見○ぬ○も○の○か○い○れ○る○は○

残○る○心○の○塵○や○あ○る○ら○む○

手○を○ぬ○ぐ○ひ○器○を○拭○ひ○く○と○も○

心○の○内○の○不○浄○な○り○せ○ば○

以○上○の○道○歌○の○、何○ぞ○夫○れ○深○切○な○る○や○、吾○等○日○々○此○考○案○に○向○て○自○問○自○

答○せ○ざ○る○可○か○ら○ず○。心○の○底○に○塵○埃○の○積○む○こ○と○な○き○や○、身○是○菩○提○樹○、

心○明○鏡○臺○な○り○や○否○や○、或○は○又○菩○提○樹○明○鏡○を○破○却○し○去○て○、一○點○の○塵○

埃○の○附○す○可○き○な○き○境○な○り○や○否○や○、口○に○こ○と○謂○へ○、大○方○の○道○士○た○り○と○て○、

塵○の○上○か○ら○敷○松○葉○、中○々○塵○の○見○へ○ず○も○あ○る○か○な○。故○に○居○士○は○

結○ひ○よ○る○垣○根○の○清○水○影○み○へ○て○

心○の○底○の○恥○か○し○き○か○な○

と○觀○破○せ○ら○れ○た○り○宜○し○く○居○士○の○

軒○端○漏○る○天○照○月○の○御○影○に○も○

心○晴○れ○て○は○耻○へ○く○も○な○し○

と○謂○ふ○境○に○達○し○た○る○、世○の○偽○り○の○茶○人○な○ら○で○、ま○こ○と○得○道○解○脱○の○宗○

匠○こ○そ○得○た○き○も○の○な○ら○ず○や○。さ○れ○ど○、昔○よ○り○世○に○迷○ひ○と○い○ふ○も○の○絶○

へ○ず○と○見○へ○て○、利○休○居○士○も○

折○た○め○て○す○く○は○ざ○り○せ○ば○如○何○ば○か○り○

世○に○迷○ひ○な○ん○罪○の○人○々○

數○く○の○穂○先○に○人○や○迷○ふ○ら○ん○

茶○筌○の○竹○の○本○を○忘○れ○て○

と○示○さ○れ○た○り○。茶○湯○の○道○は○仕○業○事○多○け○れ○ば○、其○仕○業○の○手○先○に○迷○ふ○て○、

其本を忘るゝこと、丁度今の世に、大方の僧侶が、其法式にのみ迷ひ、其根元を忘れて教義を詮究するものなきに均し。見よ今時の茶人は、懷石は流れて酒食會となり、道具の品評會となり、互に悪口の穴探し會ともなりて、其交會するの意何れにありや、知り難さ程なり。されば居士は

我庵は來らぬ人も來る人も

親し疎きをいふ事もなし

何をかな饗應す可き奥山の

ましろに頼む菓ならては

箆にもり瓢に汲みたる物くを

唐の大和の饗應なるらん

露地數奇屋客もあるしもお茶ともに

振やわらけて隔心もなし

懷石の通ひ口にも及ぶ可き

物こそなけれ折敷一ひら

と警め置かれたり、此歌意にてこそ懷石の本意たる可きを、又數奇屋露地の風情は、只佗をもて主とせる、利休一風の別天地なるを、今の世只佗の眞偽せる贅澤三味の、茶人多きこそ片腹痛からずや。居士も其他の眞意を漏らして曰く、

黒木もて建る心の中はしら

居るにもあかぬ草の庵かな

埋火に置加へつる籠にこそ

わらやの内もすみよかりけれ

棚一つ壁の隅なるつり竹の

世は只假に佗てこそすめ

腰張に勝手障子も自つから

有るにまかする反古張かな

佗ぬれば來ませて告げん方もなし

心あれなと思ふばかりに

右の心持てこそ、佗の佗たる本旨に叶ふべけれ、然るを人は只、ひねくり返りたる木の柱に、何か意味有りげに思ひ、わざく南天の床柱を探し廻るおかしさよ、げにまことの佗茶人には、來ませて問ふ人なくて、偽せ者同志はうまの能く合ふこと笑止やな、まこと茶

の湯をせん人は、先づ第一に心の業なることに心を留め、行住座臥の同伴とす可きなり。三界出離の人は、却て其三界に安居す可きであるを以て、決して出家遁走、世俗を遠離せんことを欲し、或は、佗茶は斯様なりとて、一向世務を怠りて、朝から晩迄茶三昧に入ることも、無用の迷ひなり、居士は

吳竹の其浮き節をすたくくに

引切てこそ茶の湯なりけり

と歌はれたり、此斯觀破してこそ茶人なり、一日の内一時たりとも、本來の面目に向て詮索する茶をば飲みたきものなり。飲むならばついでに、三千大世界を一口に吸盡したきものなり。居士もたいへたる茶の色のみか一口に



空のみとりも海のみとりも

と何ぞ其聲の壯なる、茶の道禪の法只是のみ。かゝる難有き茶湯ならで、只手業の傳授や、曲尺割等のみを秘傳抔思ふも、いまだ皮相の見たるを免れざる小乗底の茶なり。故に居士も一と先づはさまざまの仕業事わざ中々に

口を結べる袋棚かな

と曲尺割の秘傳。此袋棚に包含することを漏すと同時に更に

大方の數の外なるかねの音に

霜夜の覺る曉の空

と觀破して、曲尺にくゝらるゝも悟に遠さを示されたり。されどかゝる消息は到底、師傳による可きものにあらず、所謂以心傳心の法

則、教外別傳、不立文字の心法たり。されば居士は

岩つたふ苔の細道あとたへて

問ふ人もなし待人もなし

住や誰れさ山幽にほのめきて

曉すごき燈火のかけ

目にかけて分越山の嶺の松

陰ふむばかり成にけるかな

と其修行の有様を實驗的に示されたり。是とても其道に入らぬ人は、一向何等の意たるを解するに苦む。されど

何方も定めて明けしまどもなし

月と雪との影にまかせて

閉ひらく心のまゝに成にけり

開は千々の里の山風

山遠き道の往來の中屋とり

心止べきぬしもなければ

雲満る洞のうちなる松風の

聲ばかりして夕暮のそら

あかつきの窓の嵐音さへて

残るも細き燈火のかげ

水指のさすかにすめる心とは

汲まむ先より人やしるらん

野も山もひたし入たる筒の中に

花は心と生出にけり

朝な夕な吾が白露地の玉帚

有とは見えて逢人もなし

杯と一々工夫の結果を示して、見る物觸る器によせて、自由自在に

説明せば、聊か這般の消息を窺ふに足らん乎。嗚呼茶道とは、かゝ

る面白き心の業なるを、手先の業や器物の品評料理の巧拙にのみ心

を寄する迷ひ者よ。夫れ故にこそ居士は

釜一つあれは茶の湯はなるものを

數の道具を求むつたなさ

茶なくは鍋湯なりともすくなれば

夫こそ茶には日本一なり

手や口で茶をする人は多からん

心の茶の湯する人そなき

と親切に訓示ありき。予は固く信ず。茶は禪法と離れては、到底利  
休居士の流儀にあらざるを、實に禪は茶道の命脈たり生命たり、予  
の本著ある蓋し故なきにはあらざるなり。

### 一 茶道の沿革

夫れ喫茶のとは、既に支那にありては、盧全陸羽の煎茶法あり、本  
朝に於ては、榮西禪師明恵上人茶種を唐土より齎らしたる歴史あり  
と雖も、這は只其物を喫したる事實に止まり、未だ茶を喫するの法  
を以て、道を説きたるに非ざれば、之れを茶道の起原とは稱す可か

らず。抑も茶道の起元は、足利義政公時代に於て、南都稱名寺と云  
ふ寺院の禪僧、珠光なる者、京都紫野大徳寺宗純一休和尚に従ひ  
て、出塵悟道を工夫しけるに、珠光結跏趺座の間、常に睡眠禁止難  
ければ、之れを某醫に質すに曰く、睡眠を自除するは茶に加かずと。  
珠光是れより、常に喫茶を以て坐禪するに、果して効驗ありければ、  
夫れより以後、行住座臥喫茶を怠らざりけり。此頃大徳寺に臺子な  
るものあり、誰ありて其何の具たるを識るものなし。傳へて謂ふ、  
是れ禪家の清矩に基く點茶具にして、禪僧の唐土に齎らし、筑前博  
多の崇福寺に在りしを、遂に大徳寺に傳來せるなりと。珠光是れを  
見て、此器決して他具にあらず、點茶の用に供す可しと、種々工夫  
考案の結果、茶を細抹にし點茶するの法を發明し、之れに加ふるに、

禪家の清規に基きて、主客の禮、座作進退法に至る迄、法式を制定し、又た曲禮の書に鑑みて、規に中し矩に叶ふ組織を完成せり。於之か、益々喫茶を以て且座に比し、二六時中點茶三昧に入るに至る、或る時一休之れ見て、珠光に問ふて曰く、喫茶旨無の時甚麼と、珠光無言にして去らむとす、一休更らに喫茶去の時甚麼と、珠光答へて曰く、柳は綠花は紅の眞面目と、更に珠光の喫茶了せんとするを見て、一休鐵如意を振て茶碗を破碎す、珠光自若たり。一休始めて茶味の禪味なるを知て、珠光に印可し、且つ圓悟の墨跡を與ふ。是れ吾が禪的茶道の起原なり。

### 一 茶道の興立

時の將軍慈照院義政公、應仁の兵燹平定するや、國家の太平を機として、東山に銀閣寺を建立せし杯、驕奢に耽り、唐倭の重寶招かずして集り、歡樂願ふて叶はざる事なきに至りて、遂に遊樂の道盡く。時に世に茶道なるものあり、以て遊具となす可きを聞き、其堪能の名ある珠光を召して其法則を問ふに、珠光其本旨を以てす、即ち珠光茶論に曰く。

將軍義政公召光問曰茶事可得聞耶。光曰。一味清淨。法喜禪悅。趙州是知己。陸羽豈得到其佳境。耶云々。源公忻然恨二逢之晚云々。

義政之能阿彌相阿彌の徒に傳習せしむ、能阿彌より珠光に傳ふとの異説もあり、然れ共、未だ當時は、充分點茶の法式完備せざりが故

に、是等の諸人と相協議して、上中下八段の臺子を撰定せしめ、曲尺割の法則を定め、始めて點茶の法則確定し、尙書院飾の法式を定めて、珍器重寶悉く集め、茲に將軍の玩具としての法則は、漸く完成を告げたり。

一 茶道の分派

茶道既に完成を告げたれば、義政公も深く珠光の道を信じ給ひ、能相の徒と共に之れを行ひければ、上の好む所下之れに倣ふの諺によりて、時の大小名を始め、都鄙遠近に及ぶ迄、風流慰翫の具として流行せり。然れ共、義政公は其身天下の權を掌握するの所を以て、前に述べたるが如く、希ふて成らざるなく、招て集らざるなく、八

疊の座敷に玉潤の唐八景の八幅對を懸け抔して、書院に古今の名器を陳列し、驕奢其極度に達すれば、争てか下之れに模せざる、上下遂に其分限を忘れ、珠光の制定せる禪的茶道の本旨も、あたらし其影跡を止めずなりぬ。纔に其本意を傳承せる者、引拙、其哉、宗把、宗陳、宗悟、紹鷗の一派あるのみ。然るに一方に於ては、義政の顧問とも稱す可き、能彌相阿彌彌は、將軍の權威に因て、彌々其勢力を増し、之れを宗海道陳等に傳へて、其名四海に震動す。於是乎珠光一派の主觀的茶道と、能相一派の形式的茶道の兩派、自づから分立の萌芽を生ぜり。

一 茶道の大成

夫れ茶道は、一休和尚の教化と、珠光の工夫に成れるは既に述べたり。然れ共、其事たる遠く義政公時代に在りて、其後引拙、其哉、宗把、宗陳、宗悟、道陳等の輩、幾百人の茶家續出し、二百有餘年の後、織田信長の時代には、茶道は既に、能相派の末流、即ち東山流なるものと、珠光の末流なるものと、兩々其趣を異にし、各混亂し、何れを正と定め難きに至れり。其間に於て、田中與四郎即ち千宗易なるものあり、東山の末流なる北向道陳と、珠光の末流なる紹鷗の兩家に就て、斯道の蘊奥を極め、之れに加ふるに、大徳寺古溪和尚に參禪して、遠く珠光老の茶法に直入會得したりき。然るに、織田信長公亦茶道を好まれければ、此茶道の混亂を觀て、千宗易に命し、之れが改正を爲さしむと雖も、遂に成就するに至らざりき。豊

公の天下の權を掌握するや、其志を繼ぎて、再び茶道の改正を千宗易に命ず。於之宗易、山上宗二藪内紹智等と謀り、古今の過不及を調査し、上は王公貴人の臺子より、下は庶民の佗茶に至る迄、悉く改正訂定を成就しければ、豊公之れを城内山里の茶屋に於て講述せしめ、諸大名高家を始め、小名都鄙遠邇の隱者閑人に至る迄、悉く神誓を呈して拜聽を許す。(藪内流山里棚は當時の紀念物なりと、於之、積年の茶弊混亂は一掃せられて、茶道の完成なし全く茲に告げられけりといふ。

一 茶道の本旨

千利休一度世に出づるや、既に述べたる如く、傳を北向道陳武野紹

鷗に受け、其蘊奥を極め、又古溪和尚に參じ、大悟徹底するに迫り、益々球光の茶禪一味を了得し、茶道を一切禪門の法式に象り、古來の關門を悉く打破し、奢侵的をして質朴的にし、貴族的をして平民的にし、複雑的をして單純的ならしむ杯、一切間然する所なきにあよびて、上は豊公を始め、大名小名、下は庶民に至るまで其門に入り、天下の茶道は呼ぶ者なくして利休流たらしめ、全く茶道を統一す。而して其説く所、風流慰翫の娛樂者を以て外道とし、此道に安んじ、性を全ふし、行を修め禮を知り、天に參じ地に同するを以て本旨とし、謙虛以て家に居り、簡約以て身を保ち、嗜好を儉にして情慾を恣にせず、言語を慎みて交遊を濫りにせず、處世の終始、一點の私を容れず、從容として道に中する底の大丈夫を以て、

眞に斯道に參究せる人と稱す。予も亦其本旨に參ぜむと欲して、日々夜々工夫すると夫れ久しと雖も、難矣哉、寄語す  
心だに誠の道に叶ひなば習はずとても茶の湯なるらむ

一 誰か茶道を怯惰の法と謂ふ

怯惰とは、元來勇武強膽に對する文字にして、所謂無膽力の義なり。茶道は、果して人を斯る軟弱無膽に陷るの法なりや。請ふ少しく之れを述べむ。抑も怯惰の因て起る所は、心理上の恐懼驚愕に誘導せられて、神身に激動を與ふるの謂なり。而して、神身の激動するは、蓋し肉體的膽力の缺乏に原因す。彼の武藝の極意と謂ふも、畢竟劍術の手段に依て、膽力を養成するものにして、如何に其術に

妙なるも、膽力の缺乏する時は、之れ全く一種の手先の技藝に陥り、未だ以て武道の達人とは稱す可からず。茶道も亦然り。其極意を極めずして、未熟の手先の技術と心得る者には、到底其眞意を語る可からざるも、前説に述ぶる禪法の一端を了悟せば、思ひ半に過ぐるものある可し。既に茶道は、武道と均しく、膽力養成の法たるを説けるを以て、是より聊か其實例を示さんには、彼の柳生但馬が、澤庵和尚に參究して、劔道の極意を悟り、山岡鐵舟居士が、滴水獨園兩師に參じて、無刀流の蘊旨に達せるが如きは、蓋し膽力養成に効あるを證するに足り、之れを茶道にしては、珠光が點茶して將に喫せんとする一刹那、一休鐵如意を掉て破碎するに、從容として自若たりしが如き、或は利休の點茶中、加藤清正、試みに長穂の鎗を

不意に眼前に擬したるに、更らに狼狽の色無かりしが如きは、今日尙逸話に残遺する所にして、甚麼に劔道と、其膽力の養成法に於て相伯仲するかを證す可し。論者或は謂はむ、説聞くとを得たり、然れ共、其何が故に點茶は、膽力養成の一助と成るかを識らずと、予之れに應へて曰く、茶道は既に述べたるが如く禪法にして、喫茶且座の間、無念無想、氣海に氣を込め、丹田に力を養ふが故なり。蓋し丹田は膽力の潜む所たるは、古來既に定論あり。(丹田のとを詳細に知らむと要せば白隱禪師の夜船閑話を一讀す可し) 夫れ然り、而るを論者尙茶道を以て怯惰の法と謂ふ乎。

一 點茶は禪法なり



和漢共に、禪家と喫茶の關係を離れざるは、其因縁を知るに由なしと雖も、趙州は悟道に喫茶去と説き、或は百丈の清規に茶禮の法則あり、又本朝に茶種を擠したる榮西禪師は、喫茶養生記を著はし、とかのをみょうえしやうほん 拇尾明惠上人は、茶の十徳を説く等、あひ 擧て數ふ可からず。夫れ斯の如く、茶は禪家に依りて世間に紹介せられ、以て今日の傳播を見るに至りたりと雖も、此事によりて、直ちに點茶の法は禪家に叶ふとは稱す可かずら。而して點茶の術も、既に支那に於ては、陸羽盧全によりて研究せられ、其未流我國に於ては、賣茶翁近くは小川可眞等に因りて行はれ、現今に至りて、益々文人墨客の賞翫する所なれ共、煎茶のとは暫く措く、茲に點茶と稱するは、抹茶手前の事と知る可し。曩きに述べたる如く、我國に於て、點茶の術を以て禪法に

叶はしめたるは珠光にして、禪法を茶道に遷したるは、蓋し紫野大徳寺一休禪師の教化なり。論者或は曰はむ、禪家既に禪定のとあり、以て悟道を得可き法則完備せり、何を好みてか之れを茶法に托すると。蓋し是れ座禪を實修したるとなく、又茶法の妙域に達せるとなきの語なり、夫れ禪法とは、自性を了解する術なり、本分を證得するの觀法なり、妄想を退轉するの方便なりと雖も、元來此座禪たるや、大上根大上智の士に非ざるよりは、彼岸に達すると難し。古來幾百萬の禪僧中に於て、解脱の智識宗匠と稱せらるゝ名僧は、實に曉天の星も雷ならざるを見ても、座禪の甚麼に至難の業なるかを證するに足る可し。既に佛道専門家にして爾り、然るを俗人に於ては、到底爲す能はざるの難道たり、實に天竺に於ては、維摩居士支那に

於ては龐居士あるを聞くも、本朝未だ大解脱の居士あるを知らず。抑も斯の如く、座禪の至難なるは其理多しと雖も、要するに妄想臆念の爲めに、三昧の境に入り難きに在り。故に禪家にては考案なるものを師に授かり、其考案三昧に入るを以て方便となす、蓋し考案其物は、戸扉を開くの瓦礫なり、一休の考案に成れる點茶は、實に此趣を遷したるものにて、茶器を扱ふ三昧に入りて、本性を觀ずる修行と爲したるに外ならず。珠光は實に之れが實驗家にして、茶に因りて一休に印可を得、利休は古溪和尚に參じ、茶禪の體を得たり。若し茶道の點茶にして、禪法に叶はざらんか、余は何の爲めに、究屈なる手前を爲すかを知らざるなり。而かも、點茶は空寂として觀法するの苦痛に代ふるに、最も趣味ある作法を以て、樂々たる愉

快を得つゝ、之れを修する便法なれば、老若男女之れを爲す可く、貴賤貧富道を求む可し。如斯茶道は、單に禪理に基因するのみならず、茶道の法式、一切禪家の法則に倚り、又用器を始め、無賓主の茶。體用。露地。數奇。懷石等の名義に至る迄、悉く禪家の用語を、因襲したるを考ふるも、茶道と禪の關係の一斑を窺ふに足る。詳細は章を追ふて述ぶる所あらむ。

一 懷石の文字

抑も茶道に於て、茶の湯に出す料理を、古來懷石と稱する理由を考ふるに、蓋し多少の沿革を有す。即ち懷石の文字、元と茶會に作る。何れの時代より、懷石と改めたるかは攻究するに由なきも、喫茶往

來中、掃部助氏清の尺牘に、昨日茶會無光臨之條。無念之至怨恨  
 不<sub>レ</sub>少云々は、是れ茶會の權輿と謂ふ可く、其返書彈正少弼國能の  
 尺牘中、御札之旨委細令<sub>ニ</sub>披見<sub>一</sub>候、訖度抛<sub>ニ</sub>萬障<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>參會<sub>一</sub>之由相  
 存候處、不慮之外客以來之處、兼日之蓄念一時相違、對<sub>ニ</sub>彼賓客<sub>一</sub>  
 徒雖<sub>レ</sub>企<sub>ニ</sub>諸談<sub>一</sub>、心者在<sub>ニ</sub>御會席<sub>一</sub>云々。此御會席の文字は共に茶會  
 に對して亦權輿なり。而して其茶會の狀を記して曰く、(前略)亭主  
 之息男獻<sub>ニ</sub>茶菓<sub>一</sub>梅桃之若冠通<sub>ニ</sub>建蓋<sub>一</sub>、左提<sub>レ</sub>湯瓶右曳<sub>ニ</sub>茶筌<sub>一</sub>從<sub>ニ</sub>上位<sub>一</sub>  
 至<sub>ニ</sub>末座<sub>一</sub>獻<sub>ニ</sub>茶<sub>一</sub>、次第不<sub>ニ</sub>雜亂<sub>一</sub>、茶禮將<sub>レ</sub>終則退<sub>ニ</sub>茶具<sub>一</sub>調<sub>ニ</sub>美肴<sub>一</sub>  
 勸<sub>レ</sub>酒、飛<sub>レ</sub>盃先<sub>ニ</sub>三云々<sub>一</sub>と。編者案ずるに、是れ當今の茶禮に非ず  
 して、所謂古式の茶禮なれ共、其今日の茶事に同じきは明かなり。  
 蓋し此會たる非常の華美なる盛會なりしは、全書に載する所なれば、

今日の佗的茶會と其趣を異にす。故に後世此奢侈的會席に區別せ  
 んが爲め、懷石の文字を撰み、音相通ぜしめたるものならむ。而し  
 て其懷石の文字は禪林に出づ。即ち禪堂に於て、朝の食事を藥湯或  
 は施粥と稱して粥を喫す。晝飯は齋又は點心と稱へ、晚餐を藥石と  
 謂ふ。抑も何故に晚餐を藥石と謂ふかを原ぬるに、佛敎の源地たる  
 印度支那に於ては、一日に二食なり、然れ共、夕刻に至れば聊か空  
 服の感あり、此時溫石を懷中すれば、溫氣腹部に生じて、漸く其期  
 を凌ぐとを得、故に藥石といふなりと。反之我國に於ては、古來三  
 食の習慣あるを以て、二食にては堪ふると能はず、こゝを以て繼か  
 に空腹を凌ぐ可き食を喫して、溫石に代用するを以て藥石の名あり、  
 然るに茶事に進むる料理は、必らずしも晚餐に限らざるも、利休の

所謂、食は餓えぬ程との語に基き、腹八分目の粗末なる料理を進むるの意にて、之れを禪林の藥石に比したると、恰かも俗家に於て、粗末なる料理を晩菜と謂ふが如し。而かも之れを藥石と稱へざるは、茶の湯は晚餐に限らざるが故に、客に對し卑下を以て、溫石を懷にせらるゝ代りに、粗飯を獻ずるの謂なり。

一 數奇の文字

凡そ茶道に、數奇者と謂ひ、數奇屋と稱する其文字、數奇或數奇と書す。果して何れか真なる、之れを諸書に詮索するに、其所説紛々にして歸一せず。其二三を録して後、之れが斷定を下さむに、先づ數奇と書するは、茶會には名墨珍器の類を、數多寄せ集めて以て樂

むの道なるが故に、數奇の名ありと謂ひ、之れを藏する人を數奇者と稱すと、蓋し東山流の所説なり。一説に曰く、佛法は自己心性の奇妙に參じて解脱す、茶道も亦禪法に起り、珠光一休に參究し、茶道の數々此奇妙の道理に叶ふの法門なればこそ、數奇と名づくなりと。是れ理無きに非ざるが如しと雖も附會に過ぐ。又凡て物を好むを、俗にすきと謂ふ、即ち嗜むの意にて好き嫌ひのすきの義なり。古物を好む人に好事家の稱あり、別けて茶家は道具好き多きが故に、數奇の文字を無意味に附會せるなりと。更らに一説あり。奇は陽數にて偶數に對す。即ち調半の半にて、物の對せざるの意、彼の侘茶人の萬事調はずして、半數なる所謂物足らぬを表し、數奇屋は物不調の家屋の稱にて、數奇者は小欲知足の人を指すなりと、就中此説

穩當なりと覺ゆ。故に拙著茶家鑒定便覽自序にも、數奇一作寄又  
 通于器、指安清貧一而樂器物之不偶一茶家上謂數奇者、寄集數多  
 器物喜之人即謂數寄者或數器者、和音相近而其意懸隔甚矣云々  
 と録し、最後に斷案を下して曰く、要するに數寄と數奇何れにして  
 も、自己の器量と分限に應じて、甚麼に解するも可なり、文字上に  
 於ては悉く一理あり、即ち數寄は萬葉假名にて、嗜の謂なれば何に  
 ても物を好むをすきと稱す。茶を好む人は茶好き、酒を好む人は酒  
 すきにて可なり。又道具珍寶を數多寄せたるを道具數寄、奇妙を悟  
 るも數奇者、侘人にて物足らぬ道具を愛し、小欲知足に安せば、數  
 奇と稱するも尙可なり。要するに、暫らく文字の葛藤を離れ、其分  
 に應じ、宜しく茶道の本旨に向て工夫し去れ、文字以外に於て、數

寄の本體を自覺するを得可しと。蓋し著者も亦説を好む人なる哉。

一 露地の辨

茶席に附屬して、露地と稱する者あり。飛石を以て歩行の路とし、  
 蹲ひを設けて手水を遣ひ、或は待合を設け中門を造り、樹木杯植込  
 みて、自然の景を作為せる所の總稱なり、抑も露地の名稱を案する  
 に、元と是れも佛説に出づ。法華經譬喻品の卷に、長者子三界の火  
 宅を出て、露地に座すとあり。又同卷に白露地の字多く散見す、蓋  
 し一身清淨にして、無物底の境界を指すなり。即ち在家の俗塵に  
 居りて、煩惱の火焰を火宅と稱し、之れに對する出世間の山中清淨  
 の地を露地と稱したる迄なり。又有露地無露地の稱あり。一休和尚

の名の依て起りたるも、「有露地より無露地にかへる」と休み雨降らば降れ風吹かば吹け」の道歌に基づく。皆佛法の悟りにも別に仔細あるにあらず、故に在家の泉水、及び庭園を露地と云ふとなし、庭外或は面砌など辭書に見えたり。古來寺院には、露地の號ありたりと雖も、考ふるに茶道興立以來の稱なる可し、何となれば、寺院には多く結構の書院の設けありて、縁先にも之れに準じたる庭の設けあり、一風の露地的質朴の庭杯は、古寺院に見受けざる所なればなり。茶席に露地を附屬せしめ、兩々相待て、世間の塵塚を離脱せしむる方便となせるは、利休居士の創意にかゝる所ならむ。即ち利休の歌に、「露地は唯浮世の外の道なるに心の座を何に散らすらむ」とあり。此文字こそ能く露地の本意を説きたるものなりと謂ふ可し。

一 茶の湯の文字

茶の湯の文字の、禪家に始まりしは、百丈清規を繙く者、點茶、點湯、茶湯、燒香、拈香、喫茶等の文字、全卷に有るを以て知る可し。點茶、喫茶、茶湯等、皆原字の儘探て今日之れを茶道に用ふ。文字上深き意味あるに非らず、只茶を點じたる湯と云ふ迄の義なり。故に薄茶一服は無論、晚茶の煮出し汁亦茶の湯なり、然るに今日にては、茶の湯茶事と云へば、單に薄茶一服を意味せず、少く共懷石を出して、濃茶薄茶を振舞ふとをのみ指して、茶の湯と稱し、薄茶一服の如きは、殆ど茶の湯とは稱へざるもの、如し。是れ今日のみならず、古來其別ありたるものと見え、利休居士も「茶の湯とは

只湯をわかし茶を點て、飲む斗りなる本を識る可し」と教へられたり。蓋し其當時に於ても、茶の湯の枝葉に奔りて、本を忘れ居る者に示されたるなり。又宗旦翁は、茶の湯は平常に在りと説かれ、行住座臥是れ茶の湯なるを教へられたり。予は曩きに體用を辨じたり。今更に茶の湯に於ても此兩儀を分たむとす。即ち今日の茶の湯は、只客觀的の儀式を指すものにて、利休の所謂、茶の湯の本とは甚麼なる意を謂ふにや、曰く圍爐裏に釜をかけて、間斷なく湯を沸かし瀉らし、能く心を用ゐて油斷せず、其湯の清淨潔白なるの意を謂ふ。果して然らば、人々各其境界に應じ、士農工商其職業を圍爐裏となし、以て其行ひを炭下火として、己れ之れが釜となり、心を湯とし、暫時と雖もぬるむとなく、行住座臥四方八面、二六時中心を瀉

らして、勉む可きを勉め、勵む可きを勵む、是れ茶の湯の本意、所謂主觀的の茶の湯とは謂ふ。かゝる道理を分別せずして、茶の湯とは、只飲食するとのみ心得、枝葉の末技に耽り、今日は茶事明日は茶の湯と、格別に事改めて隱者の真似、老人の逸樂を以て、茶の湯の極意とし、遂には器物狂となり、飲食病となり終る。故に世間の活眼者の擯斥を受け、無用の長物視せらるゝ所以なり。畢竟茶の湯は其分に應じ、業務の餘暇薄茶一服を喫し、煩惱妄念を拂ひ、清淨潔白なる日常の行爲を謂ふなれば、別段に茶の湯とて、事改むるにも及ばざるなり。平素日々新たに清淨なる心を持つ時は、客有りとして、何ぞ必らずしも狼狽するを要せんや、餽し來りて茶を供し、餓來りて飯を呈し、清談時を遷すこそ、是れまとの茶の湯なる。利

休の言葉にも、茶の湯といへるは湯を沸かして心をたぎれ／＼とあるのみ。

一 草菴の意

釋氏要覽に曰く、草を以て座を掩ふ、是れを菴と謂ふとあり。草菴は出世間の住宅にして、自然の妙所なり。茶道は世間的の觀念たる、四惡趣の煩惱妄想を出離するの内觀法なれば、之れを靜養するには、外界を寂境ならしむるを以て効あり。又茶は、質素にして儉なるを主義とすれば、自然其構造を、山林避邑の茅屋に模し、小欲知足身を安んずるの住所とす。故に草菴は露路の中にありて、其菴に入る者は、自づから神心清淨にして、寂滅するの感あり。元より山間

溪聲を聞く所なれば、其境相應ず可しと雖も、隱逸の仙士ならざるよりは得て望む可からず。されば、之れを住宅の露地に設けて其趣を移し、遠く歩みを山間靜地に運ぶを要せず、十字街頭俗塵を却けてこそ一段の面白味あり。悟りなは四條五條の橋の上往來の人を深山木にして」といふ妙所に叶ふ工夫なり。かゝる次第なれば、竹の柱に茅の屋根、荒寸莎壁の不器用なる建築にてこそ面白けれ、今日の如く、床柱は檳榔樹、天井は薩摩杉、茶道口が何寸で、此柱が何分と、八釜敷なりては、既に草菴の本意を失ひ、全く作爲物となりて自然の妙所に叶はず。予は京都滯在中、此草菴の間に答ふには、常に庭前の山服にある傘席を實見せしめて、其意を語れり。抑も傘席時雨亭は、嘗て豊公伏見桃山に、金瓦朱樓の玉殿を築くや、



茶席を利休に命じたり。利休此積極的驕奢の普請に對し、消極的に質朴の席を好めるは此席なり。時雨亭は、天然木を以て構造せる高樓たり、床に圓窓を設けて、淀川の引舟を望む可く、三方障壁なく、時雨來れば袖を濕す可し。蓋し其名ある所以乎。階を下りて廊は傘席に連續す、席に安閑窟の額あり、栗の皮附丸太を以て四方を結び、同じく栗丸太を横へ、其中央に一本の枝木を直立せしめ、其頂上より竹を傘の骨の如く、幾條となく四方に下し、之れに茅を以て屋根を葺く、内部より之れを見れば、恰かも大傘の裏に在るが如し、其名の因て來るも亦茲に存す。其不器用其無法、若し是れ利休の作に出でずんば、人にて何とか云はむ、必らずや下すに茶席の名を以てせざる可し。而かも之れ天下の名席、豊公の遺愛なり

とす。果して其價值ありや無しや、曰く客觀的價值としては半文錢に當らずと雖も、其能く自然に出て、草庵の主旨に叶ふに至ては、蓋し他に其比を見ざるものなり。斯く賞嘆すればとて、世人之れを真似し、贗せ茶人となる勿れ。

一 四疊半は茶席の根元説

本朝の茶席は、東山銀閣寺東求堂の四疊半を以て濫觴とす。蓋し古來各禪家に於て、方丈室あるより之れを茶席に移したるものなり。以來茶席は、此禪家に緣故ある、方丈の室を以て真と定む。抑も禪家に方丈の室ある所以、及び茶室を方丈とせる次第、並に四疊半を方丈と謂ふ義に就ては、諸書其詳説を見ず、然れ共、聊か考證せる

一班を記すれば、維摩經不可思議品に、維摩詰丈室に、三萬二千の獅子座を設け、文殊菩薩を請す云々とあり。即ち四疊半裏に座禪して、三千大千世界を吞却して、自由自在の活達を得るの譬喩なり。故に禪家の住職は、常に此室に座禪し、大衆皆茲に入室するを法とす。禪僧を方丈と稱するも、常に此室にあるを以てなり。而して方とは天地の四方にして、一は萬物の始め、丈は長さを謂ふ。即ち一丈四方の略訓なり。然れ共此一丈四方は、室内の一丈四方に非らずして、地形を一丈四方に築き、其上に内則九尺四方の室を設け、其中に三尺四方の敷瓦を九枚並べたるものにて、日本にては、疊を四枚半敷く、蓋し疊一枚は三尺四方の瓦を二枚分にて、中央の半疊のみ古式を存す。(後世能阿彌臺子に基き一間を六尺三寸或は五尺八

寸に改む) 四枚の疊は東西南北に象り、中の半疊は中央を表するなり。即ち九枚の瓦を以て九天に配す、かゝる次第なるを以て、道に禪意を寄すると同時に、此四疊半を以て亭主の行住の室と定め、且座喫茶の間に大悟せしむる方便とは爲せり、故に方丈は茶席の根元にして、又眞の席とす可き所以なり。

一 捨虚取實傳

佛教に於ても、四千餘卷の經文は、畢竟佛祖の涎唾に過ぎず。又聖賢の經典は、是れ悉く藥の効能書のみ。されば佛教の要は安心を求め、聖賢の教は道を行ふにあれば、悟入達道の曉は、經卷經典は既に其必要無きに至る可し、而かも如何なる金科玉條の寶典と

雖も、悉く書を信ずれば書無きに加かずの語の如く、糟粕多きものなれば、宜しく之れを取捨辨別して、自己の營養に供せざる可からず。况んや人の言語に於てをや。故に茶道に於ても、古來其書に乏しからずと雖も、一卷中二三の粹を抜かば、他は悉く陳腐の糟粕たるを免れず、爾れば之れに因て後進者を教導するの、宗匠家の説たる、利休の涎唾に非ざれば、自家の捏造説なり。されば此道に達せむと思ふの士は、古來の先輩の説を博く見聞し、一紙片言の取る可きは、悉く之れを求めて、其奥儀を探究すること秘傳なりと雖も、其書籍の玉石混淆を鑑別し、師傳の誤謬を辨識する底の悟道を得ざれば、彼の經卷を以て佛敎の眞理を得たりとし、聖賢の經典を繙きて、藥の効能書に均しさを解せざると何ぞ撰ばむ。道歌に曰

「習ひをば塵埃とを思へかし書物は反古腰張にせよ」と。余の捨虚取實傳、蓋し此意に外ならず。

### 一 意進理進業進

意進とは、凡て智力の感情に訴へて、自己の目的を遂行せんと欲する心理作用なり。理進とは、其目的を遂行するに當りて、之れを理論即歸納演繹の理法より推究して、確實なる實行を爲さむとする應用方法なり。業進とは、以上の意進理進の結果なりと先づ前提して、次に茶道を稽古せむと欲する人は、宜しく此順路によりて進むとの、最も捷徑にして、且つ確實なるを信ずるが故に、茲に聊か其理由を述べむに、先づ何事を習ふにも、此意進力に乏しければ、必らずや

中途障碍の爲めに絶望するものなり。之れに反して、意識を鼓舞して猛進せむか、常に活氣を帯び、企望に伴ふ愉快を生じ、決して困難障碍に破るゝとなく、却て反對に意進力を勉むると、例令ば炎々たる猛火は、風力の消す能はざる所にして、却て火勢を増進すると一般なり、然るを道に入るの目的薄弱にして、意進力なき者は、常に障碍を口實として中絶するものなり。若し道に熱すれば、四圍何の障碍か之れあらむ、而して此意進に次て要するは理進なり、如何に目的希望強固なりと雖も、之れを究めざれば、餓して食せざるに均し、何れの日か腹に満つるとやある、宜しく之れを自己の學識知識に訴へ、以て推理研究す可し。然らざれば、決して古今を凌駕する底の達人たるを得ざるべし。即ち、自から之れを研鑽したるに非

ずんば、古人の糟粕今人の涎唾のみ、是れ凡ての事物を學ぶの秘訣なり、夫れ然り、以上の意進力に因りて理進むの結果は必然的業進ひなり、然るに今日世間の凡での事を稽古する有様を考ふるに、少なく共三者の内二者の缺乏せるを見る、即ち意進理進の二要素を缺き漸くにして業進をのみ他人に模せむと欲す、先づ茶を習はんとする人曰く、我れ客になりたる時、耻辱を取らざれば可なりと、比々皆然らざるはなし、既に自から希望を捨つ、其達す可きの度知る可きのみ。佛教に於ても、以上三要素は佛果を得る必要條件なり。希望の強固を大願發心と稱す。故に此發心よりして大願を起すに非らずして、彼の親が數多の子供あるを以て、坊主にてもせむと云ふ。所謂でも坊主なるものは、自から發心したるに非ざるが故に、強固